

585-117



1200501523768

585

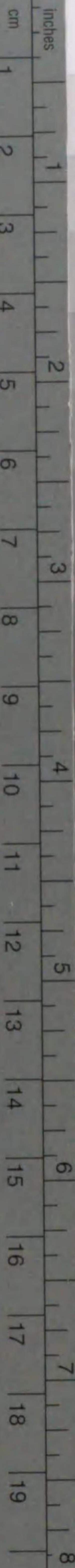
117

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black

138



露伴學人著

ひ
と
こ
の
猿
蓑
抄

岩波書店刊行



引

素堂かつて續虚栗に題して曰く、風月の吟斷えずして、しかももとの趣向にあらずと。まことに然り。世に芭蕉七部と稱するもの、冬の日より春の日、春の日より曠野と、次第に趣向も移り、風姿もかはりて、ひさごに至り、猿蓑に至つて、願れば冬の朝日の天晴れに華やかなると時雨に猿の小蓑ほしげなるとは、大に觀を異にせり。人多くは猿蓑を稱して蕉風の極致とすれども、或は又冬の日を揚げて其の高華をたゞふる麥水の如きあり。されど畢竟は彼一時、此一時、四季の流行の功成れるものは去り、業未だしきものは來り、各其化を遂ぐるが如くなるべく、詩歌の道は後なるが前なるより勝るといふことも無ければ、甲乙をかたくなに定めんことはおろかしく、好悪は人の欲するに従ふべし。たゞ曠野ひさごより漸くに世人の解し易きもの多くなり來りて、従ひて感興を動かすこと多くなりまさり、猿蓑に於て江湖の之を解し之を喜ぶ者愈多きに至りて、芭蕉の葉風、元祿の世に渡りて清涼の氣を戦がせたるは、争ひ難きこ

となるべし。さればひさご猿蓑二集の解を要するもの漸く少けれども、二百餘年を隔てたる今、間猶ほ人の耳目に疎きものも有り、且は引續きたることなればと、行く水に滞れる落葉塵芥かき流し去らんばかりに如是。

昭和四年晚秋

露伴學人

ひさご猿蓑抄

露伴學人



ひさごは元祿三年の刊なり。越人の序に徴して、江州の人々の手より世に出でたること知るべし。濱田珍碩主として事を執りしならむも、撰集の鑿裁を芭蕉に仰ぎしは論無し。但し巻中に芭蕉の名を出さずして、翁とのみ記せるを以て、芭蕉此集にはあづからざりし如く見ゆ。されど是れ珍碩等が師を崇敬するの餘に出でしのみのことにて、芭蕉刊本を目にするに及びて、翁と記して名を記せざりしことを憚るべしと爲したりしといふ談傳はれり。珍碩等の過失たりしことは、云ふまでも無し。故に後の集の猿蓑炭俵等は、復び翁とは記せず、芭蕉と記したり。一集の風

調曠野にや、異なり、春の日にや、近し。曠野は好き巻も有れども、碎けて卑しく、宜しからぬ巻も有り。此集は春の草の巻に荷兮越人が十八句有るほかは、作者も皆異なりて、おのづから曠野の中の弊處を承くることなど無く、總體に於ては曠野よりも佳き集なり。されども許六が宇陀の法師に、名古屋の荷兮越人、あら野に眼開きたるに似たれど、瓢に底を入れられ、湖南の連衆は猿籠に關をすゑられたり、など云へるは非なり。許六は底といひ、關といひ、其の俳諧問答には、堀切など、いふことを云へるが、芭蕉は底を入るゝの、關を設くるの、堀切を作るのといふことを爲せるものにあらず、又詩歌連俳諧の道に底も關も堀切も有るものにはあらず、假令有りとするも芭蕉の意に隨ひて構へ成さるべきものにもあらず。許六の血脈呼はり、支考の虚實論、いづれも芭蕉の光を假りて自ら耀かすもの、孤子寡婦を欺くべし、聲聞辟支をだに動かすに足らず。芭蕉が事は芭蕉が句に問ふべし、ひさごの風はひさごの集にたゞすべし。許六支考二人の言は、自讃毀他のために眉を揚げ舌を鼓せるが多し。斟酌して聽く

可きなり。

花 見

木のもとに汁も鱈も櫻かな

翁

千載和歌集卷二、白川院御製、咲きしより散るまで見れば木の下に花も日數もつもりぬるかな。調はこれに似たり。西行、山家集卷上、木のもとの旅寢をすれば芳野山花のふすまを被する春風。意はこれに通ひたり。泰平の歡樂、花下の興趣、天時人情、春十二分なるなり。

西日長閑によき天氣なり

珍 碩

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。古今集卷二、紀友則の歌は夕暮にはあらず。山里の春の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける。新古今集卷二、能因法師の歌は歡喜せるにはあらず。これは發句に打添

ひて、喜びつかれ樂みつかるゝまでの永き日の七ッ八ッ過ぎ、空に風も無くして、櫻花たゞ咲満ちてこぼるゝ、雍和駘蕩のさまを盡せり。 4

旅人の風かきゆく春暮れて

曲 水

よき天氣なり、と日和を考へたる態、前句にあり、乃ち此の旅人の句あり。一句は分明に春の暮の綿入すでに重苦しきさまなり。

はきも習はぬ太刀の鞘

翁

鞘は刀室なり、さやなり、一字にてひきはだと訓ましむるは無理なり。たゞし當時よりの口傳ならむか、ひきはだと訓み來りたれば、墓膚と讀むべし。墓膚は墓の膚の如き皺文の意にて、しぼの立ちたる革を墓膚革といひ、さる革をもて旅行などに用ゐる太刀の後鞘を造る習なるより、詳しくは墓膚革の後鞘といふべきを、墓膚とのみ略し言ひて其物を示すことゝなりたるなり。甚だしき略言なれども、古より呼習はしたれば、咎むべからず。たゞ鞘といふ字を

用ゐむより墓膚又は引膚とせむを可なりとすべし。後鞘は虎、熊などの皮を太刀のさやに合せて袋のやうに作り、掩蔽して雨露水濕を避くる用とするものにて、墓膚は後鞘の最も細きものなり。一句は年若き官人の任地などへ下る態にて、旅路の長きに物憂く思へるさま、おのづから見ゆ。

月待て假の内裏の司召

珍 碩

司召は除目なり。春に於て縣官を除せらるゝを縣召といひ、秋に於て京官を除せらるゝを司召といふ。月待ては、月待ちてにや、月待たでにや、確ならず。秋の除目は八月十一日より十三日頃までに行はるゝを通例とすといへり。然らば月待ちてにてよろしく、又假の内裏とある故、月待たでにても宜しく、いづれも通すべし。曉臺曰く、はきも習はぬと云ふ詞より、猿島内裏の倂ならんと。其説蓋し非なり。猿島内裏と爲さざるも、假の内裏にて可なり。

靱白つくる杣が早わざ

曲 水

大鏡に一書の説を擧げて、大嘗會の時、悠紀主基の稻をつく白なりといへるは、考へ過ぎたる誤なるべし。大嘗會にはあらず、假の内裏の司召といへるまでの前句なり。靱白は搗白か磨白か、既に靱白といふ、靱すり白なるべし。靱すり白は磴なり、磴なり、竹を編み泥を充て、竹木をもて齒を爲して、靱を去り米を收むるものなり。樵夫の作るには似合はしからず。人をして疑を生せしむるの句なり。されど一句は、前句の假の内裏といへるを、吉野の皇居など、取りて、柚が早業に靱白つくるは、多人數の俄に山里に群るゝ爲の用を濟すことを云へるなるべし。或は特に靱白など作るべくもあらぬ柚の之を作るといふことを強ひて作者の作意せるにもや有らん。

鞍置る三歳駒に秋の來て

翁

前句に急遽食料を得んとするさまあり。此句は確と指せることは無けれども、一句に颯爽たる氣勢を含みて、將に事有らんとするさまを、たゞ目前の事實をもて現はしたり。鞍置ける馬といへば、農馬、馱馬、牧の馬にはあらずして、

然るべき士の乗用の馬と聞ゆ。三歳駒といへば猶ほ聊か若けれども、既に骨格整ひ、精神足りて、若きだけに驕騫凌越の勢餘り有るなり。秋の來てといへば天高く風冷やかにして、馬愈、舊ひ起ち、影を睨て高く鳴き、羈を斷つて飛奔せんとするなり。前句と此句との、言辭の外に響應するもの有るところを聴取すべし。馬を引き來りて白造りを催促するなり、或は米苞を登す馬なり、などといふ舊解は、庸醫の意を以て神醫の方を解するものならむ。

名はさまぐに降替る雨

珍 碩

秋の天の定め無くて、一ト村雨のさつと降り來れるなり。御降りといひ、春雨といひ、卯花くたしといひ、五月雨といひ、今こゝに率然として至れる雨は秋雨なり。名もさまざま、降りざまも様々、サツと降來れる雨に、今や三歳駒の勇ましきに乗らんとして平首搔撫でたる人の、亂るゝ雲の足早き空を仰ぎ見たるさま、如何にも面白き附句なり。芭蕉の三歳駒の句を柚の早業に附けたるも、今の言葉にて云へば、氣分の附なり。珍碩の此句を三歳駒に附けたるも、同

じく氣分の附なり。氣分の附は事由理路無しといふにはあらねど、事理を超えて、前句の有する全幅の氣分と同じ氣分、若くは協律的の氣分を附くるなり。幽玄の附とは異なりて、詩論にて云はゞ、神氣を以て貫くといふものなり。前に説來れる解釋も、解釋のことなれば成るべく事情理致をもて説破しつれども、まことは事理を追ひて解き碎かんよりは、寧ろ事理を總べて全く呑み下して、前後の句の神氣相通じ相協ふところを心解神悟せんことを求めんかた遙に優れるもの有りしなり。俳諧連歌には限らず、詩歌の道、其の低級ならざる者は皆然り。氣分を會得せぬ者は、詩歌を談するに足らざるものなり。氣分といふことを今更事新しく論ずるも、古より分明し盡したることに、遼豕の陋を誇るものなり。

入込に諏訪の涌湯の夕まぐれ

曲 水

入込は貴賤男女を分たず入るゝなり。涌湯は涌し湯ならで自然の湧湯なり。信濃の諏訪、温泉甚だ多く、人の知るところなり。入込の人々、國々里々異

なれば、雨の稱も種々にて、夕暮の降出しに兎や角と騒がしきなり。

中にもせいの高き山伏

翁

寫實體にて、おもしろし。山伏なりとは髪の形物ごしに知られたり。

いふことを只一方へ落しけり

珍 碩

山伏多勢集まりて、本山派か當山派かは知らず、何事か評定する時、中にも丈高き某法師の、強情我慢にて、人の言葉は耳にも入れず、前後左右の斟酌も遠慮も無く、片意地の一途論を推通したるなり。

細き筋より戀募りつゝ

曲 水

前句、たゞ一筋氣の、傍へは寛がぬさまなれば、此句は戀に左右を考ふる暇も無き情の逼迫せるを云へり。

物思ふ身に物喰へとせつかれて

翁

戀募りて病ならぬ病の身の食事もはかしくしからぬを、傍より物も喰はではと催促せられて、人知らぬ胸の中、いよ／＼苦しきなり。

月見る顔の袖重き露

珍 碩

前句の人の風情を見はしたり。

秋風の舟をこはがる波の音

曲 水

秋風さびしく毛管を吹きて、夕波しげく舟端を拍つに、故有りて都を離れし女の、月下に凄凉の情、怖畏の感を懐くなり。前句に女らしきところ見えれば、此句にも女らしきさまを見せたり。貫之の土佐日記、平家の西國落の倂など、説くにも及ばざるべし。

雁行くかたや白子若松

翁

白子若松は伊勢の地名なり。沖の船の上より、あの雁の行く方は白子若松ぞと見やるなり。何事も無けれど、無曲折の中に無限の曲折も有り、含蓄多き句なり。此意甚だ幽なり、人々の咀嚼に任す、といふもの、即ち是れ如是の句。

千部讀む花の盛の一身田

珍 碩

一身田は、いしんでんと讀むなり、伊勢の高田派本山ある地なり。千部とは經千部を讀誦することにて、こゝには淨土三部經を一部として、毎年三月、僧百人にて十日の間轉讀するなり。前句は秋の雁なれども、行くかたといふ語ありて、春の歸雁ともすべければ、此句には歸る雁として扱ひたり。一身田は白子若松への地名對なり。前句偏狭ならねば、此處に自在を得て、此の佳句を得たり、前句たゞに賓雁を云へるならば、此處に春の花の句を置き難からん。

順禮死ぬる道の陽炎

曲水

順禮は三十三所観音又は所在神佛を順次禮拜しありく道者にて、叫化乞食するものなり。前句とのかゝり分明なり。但し佳句なれば、對句發感の境、おのづからに廣し。自己所感の一片をもて此句を説盡さんとするは陋なり。難中之難、無過此難の大經の文を擧げて、我が宿縁の良好を喜ぶと説ける如きも、過りたるにはあらざれども、それが此句の本意といふにはあらず、此句の本意は如句如文なり、一句も附味も、解を須ゐず、又解し盡さんとすれば却て解し盡すを得ざるなり。佳句也。

何よりも蝶のうつゝぞ哀れなる

翁

莊子夢に胡蝶と爲ることを引ける解釋などは、用無し。莊子は夢に胡蝶となり、現に莊周となる。周の夢に胡蝶と爲るか、胡蝶の夢に周と爲るかを知らず、と云へり。順禮の夢に蝶と爲れるにもあらず、蝶の夢に順禮と爲れるにも

あらず。前人甚しき曲解を下せり、厭ふべし。こは莊子に依れるにはあらず、莊子を翻せるなり。莊子は死生を一にし、苦樂を齊しうして、物化を説けり。故に郭註に曰く、愚者は竊々然として自ら以て生の樂む可く、死の苦む可きを知ると爲す、未だ物化の謂を知らざるなりと。成疏に曰く、新に變化し、物に遷流す、何すれぞ生に當り死を慮り、妄に憂悲を起さんと。莊子の本意は郭成の言の如し。こゝには蝶の夢を言へるならず、蝶の現を言へるなり。順禮こゝに死して、陽炎其身を繞り、蝶ひら／＼と飛んで笠に柄杓に笈摺に羽うつ。そこを芭蕉の何よりもとは云取りたるなり。何よりもたゞ身を現と思ひ居る蝶のおはれなりといふ心を述べたりと前人の解せるは、詩境詩情に疎き論なり。うつゝといふ語、夢に對する現のことなるは論無し。されど夢現不定のやうなる場合をも、俗にうつゝと云ふは、夢現の略にて、うつゝのやうに聞いたりといふは、夢のやうに聞いたりと、いふに同じく、いづれも略用といふものなり。人をして睡らしめずして責め問ふを、うつゝ責といふ語も有り。谷川士清は、うつゝ、無きを俗に略してうつゝとのみ云ふは通じ難しと云へれど、是れ

即ち士清もうつゝといふ語の通俗には夢現不定を云ふことあるを認めたるなり。されば伽羅庵隨筆にはうつゝの説ありて、天下おしなべての説に反し、その現といふ詞、起居て心のはきとしたるを云ふやうには聞えざるなりと云ひて、うつゝといふ詞、物の定まらで空虚の如くなるに用ゐる詞なるを、古の博士の唐より來りたる現の字を、我國のうつゝといふ詞にしづめそこなひたるを、古人の朝に失ひたるを野に求むといへるが如く、兒女子の詞には古の残りて、起もやらず寝もやらず、うつら／＼として居たる間をうつゝといふが、誠のやうに思はるゝなり、と云へり。伽羅庵が此説は、自らも古今の人に對して荒涼の論なりと云へる如く、必ずしも妥當なりとは爲すべからざれども、しかも、うつゝといふ詞の實際の世に於て有てる意義を示したることは否むべからず。伽羅庵は俳諧者流中の最も學有りものなり、此論芭蕉の此句に對して發したる言にはあらざれど、芭蕉が此處に蝶のうつゝと云へるは、伽羅庵が言の如く、空虚の如くなるを云へるなるべし。順禮は春の日の路のべに死し、三人四人の人々立止まりて、或は哀み、或は嘲り、或は土地の累を爲すなど、云合

へる中に、蝶は心有りや心無しや死を哀めりや春を樂めりや何かは知らず無關心無邪氣に、物の定まらで、空虚の如く、たゞひら／＼と死者の枕邊脚邊に飛びめぐるが、却つてまことに哀れに悲しきなり。伽羅庵も或は心の底に芭蕉の句を思ひて論じたるや測るべからず。此條の前に、すまふといふ詞を説きたるも、冬の日の芭蕉の句、露萩のすまふ力を撰ばれずといへるに因みありげなり。雁行くかたより此句まで、句々玉を聯ね珠を貫きたり。

文書くほどの力さへ無き

珍 碩

前句の蝶の飛べるを庭の面などに見居る人の、いと物憂げに惘然たるさまなり。文書きさして、弱々とただ蝶をあはれがりたる、戀のなやみに憔悴せるさま見るべし。

羅に日をいとほるゝ御かたち

曲 水

羅は薄物と訓むべし。前句の人の態なり。羅に日を厭ふ御容といふ、貴女

麗媛たること、句の仕立柄にて知らる。

熊野見たきと泣給ひけり

翁

舊説白川法皇の御倂、花山法皇の御倂なりなどいふ。皆然らず。大鏡は、久仁親王御年十一、しきりに熊野へ參るべきよし仰らる、されば泣きたまひけるの詞にも叶へり、と云ひ、婆心録もまた其説を承けたり。久仁親王は御年七歳にして寶位に即かせたまふ。後深草天皇と申奉る御方なり。御年十一に渡らせたまふ時、熊野へ御幸ならんと仰給ひしことなど、何の書に見えたりや。且又さる事ありしにせよ、それを泣きたまひけりなど、申すこと、文藻の上のみ、の事とは申せ、至尊に對し奉り、不敬不謹に當りて、けしからぬ事なり。熊野は皇室に於て尊崇ありしことなれど、據るところ不明なることに、御宇しろしめしたる君を御名さし奉り、しかも芭蕉泣き給ひけりと句作したりなど、云ふは、皇室に對しては畏れあり、芭蕉に對しては罪を得さするといふものなり。もとより倂の附句なれば、確と何々の事を云へるにはあらねども、此句は前句

の貴き女性のさまにつけて作意を出したるなり。建長二年三月十一日、後嵯峨上皇、熊野山へ御進發あり、前太政大臣以下供奉したること、百鍊抄第十六に見えたり。還御は四月五日なりしなり。當時神參りのことなれば、物見車を立つることなど禁められたるに、大宮女院(後嵯峨帝中宮姞子)ばかり、それも出車はなくて、たゞ一輛にて見奉り給ひしこそ、やんごとも無かりければ、辨の内侍、折りかざす竹柏ナギキの葉風のかしこさに、獨り道ある小車の跡、と詠みたりしこと、増鏡第六に見えたり。此の大宮女院は、同書内野の雪の卷に、安らかに常は一つ御車(後嵯峨院と)などにて、たゞ人のやうに華やかなる事どものみ隙無く、萬あらまほしき有様なり、など、記されたまへれば、上皇の熊野詣あらせられて、二十日餘りを引分れるさせたまふべきにより、たゞ一輛にて見奉りたまひし御心の中、共に熊野見たしと思させたまひけん、そこを芭蕉の、確にそれと指したるにはあらねど、然るかたも有りなんと、例の倂の附をもて、前句を承けて熊野見たきと泣きたまひけり、とは云へるなり。大宮女院の、其後熊野へ上皇御同列にて參りたまひしことは、増鏡の其條の末に、其後もまた程なく御幸あり

しかば、女院も参りたまひけりと有り。百鍊抄第十七、三月八日、上皇並に大宮院南山御進發也、と記し、四月一日、上皇自熊野御還向、と記せり。されば後深草天皇御十一の御時の御事の倂といへるは當らず、辨の内侍の歌を詠じたる時の事の倂といふべし。なぎの葉風のかしこさと云へるは、熊野の神威のかしこさといふことなり、竹柏は熊野の神樹にして、詣るもの其枝葉をかざして歸ることの習なりしは、保元物語の文にも夫木抄の歌にも見えたり。

手束弓紀の關守がかたくなに

珍 碩

舊解に手束弓は紀の枕詞なりといへり。虚言にして實例無し。紀の冠辭はあさもよしなり。手束弓は手に執る弓といふまでのことなり。一句は紀の關守のかたくなにして、弓取りて此處通さじと云ひ張りたるにて、熊野見たしと遙々來つる人を情無く遮り阻みたるさまを前句に付けたるなり。さて又一句の仕立は、今鏡の奈良の御代の條に、清輔袋草紙に據りたると覺しくて、天平勝寶五年の春、左大臣橘卿の家に、諸卿大夫達、宴し給ひけるに、主人の大

臣問ひて宣はく、あさもよし紀の關守が手束弓ゆるす時無くまづ笑める君、といふ歌の始、如何と侍りければ云々とある其の歌に本づきて、前句熊野見たしとて悶え泣くとなれば、許す時無くの語に因み、俳諧に爲して、こゝには附けたるまでなり。云はゞ遣句のやうに、軽く會釋して流したる、さそくの洒落の句なり。別に深意あらんかと疑ふには及ばじ。紀伊和泉の境、雄山の關守山口庄司次郎が家に傳へし靈弓あり、元來尊き弓といふを訛りて手束弓と呼做す云々など云へるは、然る弓も有るかは知らず、こゝには何の關はることも無き談なり。但し弓に紀の國の事は、今昔物語卷三十の第十四の談に□の國□の郡に住みける男有りけり。其妻貌美麗にして有様いみじかりければ、夫去り難く思ひて棲みけるほどに、妻夫寝たりける間に、男の夢に見ゆるやう、我汝と相棲むといへども、我忽に遙なる所へ行きなむとす、汝を今は見るべからず、但し我が形見をば留置かむ、それを我が代りにあはれぶべき也、といふと見るほどに夢さめぬ。男驚き騒ぎて見るに妻無し。起て近き邊に此を求むるに無ければ、奇異と思ふほどに、本は無かりつるに枕上に弓一張立ちたり。これを

見るに夢に形見と云ひつるは此を云ひけるにやと疑ひ思ひて、妻若し猶や來ると待てども遂に見えずして、戀ひ悲ふといへども甲斐無し。これは若し鬼神などの變化したりけるにやと怖ろしく思ひけり。さりとして今は如何はせんとすると思ひて、其弓を傍に近く立て、明け暮れ妻の戀しきまゝに、手に取り搔拭ひなどして身を放つことなかりけり。然て月來を經るほどに、其弓前に立ちたるが俄に白き鳥となりて飛出で、遙に南をさして行く。男奇異と思ひて出て見るに、雲につきて行くを、男尋ね行きて見れば、紀伊の國に至りぬ。其鳥亦人となりにけり。男さればこそ此はたゞものにはあらざりけりと思ひて、それよりぞ返りにける。さて男和歌を詠みて云はく、あさもよい紀の川ゆすり行く水のいづさやむさやいるさやむさや。此歌近來の和歌には似ざるぞかし。あさもよいとは朝アサめて物食ふ時をいふなり、いづさやむさやとは狩する野をいふなり云々とあり。此事は源俊賴朝臣祕抄にも見え、又俊賴朝臣散木奔歌集卷七に、修理大夫顯季の樋口にて、戀の心をよめる、別れにし手束の弓のしら鳥を紀の川ゆすり戀ひぬ日ぞなき、といふ歌見ゆ。歌の意の今昔

物語に見えたる古談に據れるは言ふまでもなし。下河邊長流續歌林良材に、かの弓は紀の關守が弓にてありけるといへり、ふるき歌に、紀の關守が手束弓とぞよめる。亦曾禰好忠が歌に、まくらなるあふちの眞弓見る時ぞいもが手風はいとゞ戀しき。此歌彼女の弓になりたる事にやとぞ覺ゆる、と云へり。枕なるの歌は、夫木和歌抄卷三十二に見えて、妹が手風は君が手風とあり、詠者しらすとあり。今本曾丹集には、戀十首の第四首、ましろなるおきのまはゆき見る時ぞ妹が手せは、いとゞ戀しきとあり。妹が手せはといふこと心得難く、一首の意も通せざれば、疑も無く甚だしき訛誤あるならむ。されど樗の眞弓も疑はしからぬにあらず。いづれにせよ、紀の關守が手束弓ゆるす時なくといへる古歌の語に據りたるまでの一句なり。

酒ではげたるあたまなるらむ

曲 水

其人の體なり。酒を愛して人言を用ゐず、禿頭赤く輝けり。可笑味の句なるのみ。

双六は二人相對して互に二箇の骰子^{サイ}を振り、其盤の各十二の格に、骰子の目の數ほどづゝ馬十二を競ひ進めて、早く馬を敵へ送り了りたるを勝とする遊戯なり。目は骰子の目の略なるべし。又或は碁盤の格のさまを碁盤目などといふ語も有れば、これも双六盤の格を目といへるにやあらむ。双六に耽りて、暮色既に逼りたれども燭未だ至らず、老人俯視する頭顱の赤々と兀げたる人をして笑を發せしむ。目を覗くところ、さし出したる頭、睹るが如し。

假の持佛にむかふ念佛

珍 碩

双六を打止めて、夕念佛したるなり。持佛は家廟又は佛壇といふほどの事なり。燈明を供したるは言外に見えて、前句を承けたる、作者の乖巧、人をして點頭せしむ。或は曰く、双六に淨土双六あり、故に其の因にて此句ありと。解に過ぎて、却つて味無し。さて一應の解は前に言へるが如くなれど、猶ほ一段

深めて味はへば、持佛といふ語、其家の佛といふ意にも用ゐらるゝ例故に、前の解の如くにもあり、別に又持佛といふ語は其人の仰ぎ崇めて持ち居る佛像をいふ語にて、むしろ其方本義なり。こゝに假の持佛といへるに心をつくべし、假の持佛といふもの、眞には如何で有らんや。然るに假の持佛といへるは、是れ俳諧なり。持佛はいと小なる厨子に納め奉りて錦の囊などに入れ、身に添へ持つを常とし、危難憂惧などあるに臨みては手にさゝげ頂に戴きて、南無南無と祈念するなり。今假の持佛といへるは、双六の骰子の入りたる筒^どにして、筒より骰子を振出せば勝負そこに現はるゝこと故、筒を戴きて、南無々々、何とぞ勝たせたまへと念するさまのをかしさ、假の持佛にむかふ念佛とは云ひたるなり。然も露骨に骰子の目を乞ふとか、又は筒を戴くとかなど云ひては、所謂べた附の惡句となりて、一句も作用なく、次句も難澁となれば、表は實の念佛の如く云做し、裏には假のと云へる一語に、聞取る人の聞取るに任せて、をかしみを含めしなり。双六打つ人の筒を執り、骰子を振出す時のさまは、源氏物語、常夏の卷、近江の君と五節といへる女との勝負を挑みあへるところに見ゆ。

近江の君、手をいと切に押揉みて、小賽々々といふ聲ぞ、いと舌疾きやとあり。是れ敵の賽の目の數少からむことを祈り求むるなり。又其下に、此人も將た氣色はやれる、御かへしや御かへしやと、筒を捻りつゝ、とみにも打出でず、中に思ひは有りやすらんと有り。是れ五節の君の、多き目の出でんことを祈り求めて、筒を捻りつゝ、念せるなり。双六打つ人の筒を手にする時の情態想ふべし。又、枕草紙第四百一段に、清げなる男の、双六を日一日打ちて、猶飽かぬにや、短き燈臺に火を明く挑げて、敵の賽を乞ひて、頓にも入れねば、筒を盤の上に立て、待つに、狩衣の領の顔にかゝれば、片手して押入れて、いと強からぬ烏帽子を振り遣りて、賽いみじう呪ふとも、打はづしてんやと、心許なげに打守りたるこそ誇りかに見ゆれ、と有るも、是れ一人は、敵の賽の目悪かれとて、掌の中に揉みなどして、頓にも筒に入れざるなり、一人は、さばかり我が賽の目悪かれと呪詛するとも、必ず好き目出さんと祈るなり。これ等勝負を理智の外に決する者の呪詛祈念に傾くは、自然の情にして、南無八幡、南無如來など念ずるは常なり。前句、枕草子の、双六を日一日打ちて猶飽かぬといへる段より着想した

りや否やは定めがたけれど、その風情はあれば、賽いみじう呪ふとも打はづしてんや、といふところより聯想して、筒を手にする男のをかしきさまを、假の持佛にむかふとは俳諧に句作りしたるなり。詩歌は多く其意に表裏あるものなり、裏の意は人の酌むに任ずものにて、作者もしかくなりとは云はぬことなれども、又解者もしかくなりとは云はぬが宜しきことなれども、双六に持佛の附の悟りがたきものから、あらぬ曲解に陥る人あらむを傷み、老婆心の餘り、人の味ひ知るに委ぬべきことをも、かく絮説せり。小乗心切禪師の彈呵を受けむことは勿論なり。

中々に土間に居れば蚤もなし

曲 水

つちまに居ればと讀む人あり、どまにすわればと讀む人あり。すわると云へば、一時坐するが如く聞え、居ると云へば、日常居るが如く聞ゆ。つちびさし、つちまを、どびさし、どまなど云ふは後世の俗稱なるべし。つちまに居ればと讀まむかた宜しからむ。土間は屋内の板を張らぬところなり。一句の意は

明らかにて、前句の假といふに、普請中の假住のさまを附けたり。畸人傳に見えたる桃水和尚大津に在りし時の俳といへるは、考へ過ぎたる解ならむ。一句の仕立、蚤無きを喜ぶほどの、淺小の見解の人の態なり、大悟已脱の人の俳とも見えず。桃水に關らず。

我名は里のなぶりものなり

翁

前句晉宋の間の人の如き風情有り、乃ち此句、形骸を土木にし、名利を塵芥にせる人の灑脱放逸の趣を附けたり。

憎まれていらぬ踊の肝を煎り

珍 碩

肝を煎るとは心を勞することにて、轉じて世話を燒き、周旋して事を濟すを云ふなり。茶目吉とか出子助とか、をかしき譚名負はされ居る男の、しかも、何とも云はば云へ、乃公出ですんば村の踊を如何にせんなど、鼻の頭に賦を浮め居る輩ならむ。世おのづからは是の如き者多し。曉臺評して曰く、こゝまで

十句ばかり、人倫人情打續きたれども、更に打越の沙汰に及ばず、これを逆茂木サカモキと云ふ、おのれ一人の手柄にせず、逆茂木を引退け引退け、城際まで引連れ、行くをたとへたり、古人の粉骨淺からざるを見るべしと。如何にも敘景の句しばらく絶えたり。

月夜月夜に明けわたる月

曲 水

踊より此句あり。云はゞ逃句なり。走りともいふなりと、前人説けり。毎夜の骨折、肝も煎れ、手足も疲れたらむ。

花すゝき餘り招けばうら枯れて

翁

月夜月夜と重ねたる前句に困りて、夜々曉々に秋の更けゆきて、花すゝきの末端あはれに禿びて枯びまざるを云へり。

たゞ四方なる草庵の露

珍 碩

芒野の草の庵、たゞ僅に一室方丈、有るものは露の置けるのみとなり。

一貫の錢むづかしと返しけり

曲 水

兼好法師、頓阿法師が許へ歌を寄す。曰く、よもすゞしねざめのかりほたま
くらもまそでも秋にへだて無きかせ。杳冠の體にて、五句の冠の字、よねたま
へ、となり、又五句の杳の字を逆讀すれば、せにもほし、となるなり。頓阿同體の
歌をもて答ふ。曰く、よるもうしねたくわがせこはては來すなほざりにだに
しばしとひませ。よねはなし、せにすこし、となり。此の二人才を銜ふの戲を
句の裏に籠めて、表はたゞ一貫の錢むづかしと人をことわる草庵の貧者の態
を見せたり。歌は頓阿の草庵集に出でたり。草庵の露といへる前句よりの
案じつきなるべし。をかしくはあれど、佳什にはあらぬこと、二人の歌の如し。

醫者の藥は飲まぬ分別

翁

人の情にて貧を憫みて寄せられし一貫の錢をも、なまじ之を受けむもむづ

かしと返したる、一風ある男のさまを附けたり。よしや病むこともあれ、醫は
死せざるの人を治するのみ、何の藥沙汰、いらぬことなり、と日頃手強く踏切つ
たる料簡の定まるところを云へるなり。

花咲けば芳野あたりを駈廻り

曲 水

駈廻りの下五文字に、藥は嫌ひ、花に酒には風狂を縦にする人の様子見えて、
いとをかし。一句、遙に花見と題したる發句に呼應して好し。

蟲にさゝるゝ春の山中

珍 碩

前句の人の蟲にさゝれたるなり。愁態掬す可し。

(花見之卷終)

伊賀の服部土芳は芭蕉同國直門の弟子なり。其の著はす所の三冊子に、此句名もまぎらはしとあり、芭蕉の脇句、うたれて蝶の目をさましぬるとあり。句は春の草の一時に萌立ち、瑤花玉葉、目もあやにして、いづれをいづれとも無く皆美しく盡く好もしとなり。然るに裏の意には聊か道を問ふのこゝろも籠りけむ。それを芭蕉傳書二十五條といふものに、脇に韻字有る事の條、此句及び脇句を擧げて、此句は始めて俳諧の意味を尋ぬる人の俳諧名目まぎらはしとて惑ひたるを、其所に直に一棒を與へて、蝶の夢をさましぬるところ、一句相對して脇の體ならば、韻字手仁波の詮義無しと記せり。それより後人此句の本意をさしおきて、一向に俳諧の名目紛らはしとて、珍碩の芭蕉に尋ねけるなりと云ひ、紛らはしの方宜しとまで云へり。三冊子は芭蕉の教を記したるものなれど、此句については俳諧の義を問へるなりとは記さず。二十五條は其の説けるところ芭蕉の言とも思はれざるが有り、其の口氣もすべて支考の

調子なるが多し。眼に眸子ある者、誰か其の欺瞞するところとならんや。許六が宇陀の法師、當流活法の條に、二十五條の口訣は先師の奥儀にして、これを知らざれば俳諧の道に晦しといへるを見て、二十五條を信する者あれども、許六が指して言へる二十五條は、今傳はるところの西村養魚本の二十五條、又支考が解を添へたる二十五條とは異なりたるものなるべきこと論無し。今傳はる二十五條は、蓋し口傳祕訣などいふことを賣りて財を貪らんとするが爲に作り設けたるものにて、街氣滿面、鄙陋の臭、人をして堪ふる能はざらしむるものなり。許六は名を欲し、支考は利を謀る。二人大言饒舌す、其論談すること多しと雖も、すべて聽くに足るもの鮮し。曲齋の如きは俳諧連歌の爲にすること、甚だ力めたり。而も二十五條を信じたるを以て、先づ一着をあやまる。貞享式海印録の瑣屑にして、觀る可き少きを致せる所以なり。勞を積み思を致す彼が如くにして、二十五條の爲に眼睛を瞎却せらる。若し夫れ支考許六の輩の爛言誇説を擺脫し、僧面を看ずして佛面を看る底の意氣を以て業に従ひたらむには、必ず觀るに足る有るに至りたらんに、惜むべし何の法とい

ひ彼の傳といふの樊籠裏に陷在して、畢に排雲觀月の快を得ざりしことや。

うたれて蝶の夢はさめぬる

翁

うたれては杖などに打たれてはあらず、草の動き弾くに打たれてなり。景色を付けたる句なりとのみ三冊子は記せり。脇句常體は文字を以て句を止め、手仁波をもて止めず。然るに此句、字どまりならねば、さま／＼の事を云ひて、草に蝶の字、まぎるゝ(むつかし)に覺むるの字を對せるが故に、韻字たしかなれば、てには止まりたるなり、など論せり。連歌に韻字といふことの起りたる所以をも知らぬ無益の贅説にして、たゞ後學を嚇するに過ぎず。連歌にも稀には脇句の手仁波どめ有り、一句決定して能く止まれば、字をもて止めず、辭をもて止むるも許さるゝことなり。抑、これを許さずといふとも、誰が許さざるぞや。すべて詩歌の道に、法式呼ばりを強く言張るは、宜しからぬ師の後生を壓するの言にして、草蝶紛覺の字對ある故に、手仁波止も宜しなどいへるは、所謂傳授事の押賣にて、支考が輩の好みて言ふことなり、本然の道にもあらず、

正當の解にもあらず、芭蕉は差合繰りをさへ餘り好まざりし人なり、秘訣めきたることを傳ふべくもあらず。二十五條の傳などは、撰んで從ふべし、全部をば信受すべからず。新式は貞享二年の春、晋子切りに一流の傳目を授からむことを望む、故に漸く工案成りて、同四年の五月、翁自筆にて授與有り、といへり。故に世これを貞享式といふ。其後晋子翁と議して、八條目を作れり。去來増補して四十餘條とす。元祿七年の冬、晋子去來と議し、新式の闕漏を補へりといふ。これ蕉風俳諧連歌の式に就ての傳説なれども、これ皆今傳ふる二十五條の眞に芭蕉に出でたるを證するに足らず。今の二十五條、芭蕉の手より出たるならば、引句多くは自讚に似て、聞苦しく、其他に非とすべく疑ふべき條多し。蓋し其初は芭蕉が貞門談林等と異なりたる一流を爲さんとするに臨み、内に一門の定めを極めて簡單に掟したるものありしを、猿利口の者共の竄入補綴を敢てして、傳授事の如くに捏上げたるものにして、全く種子無しのものにはあらねど、種子は甚だ少くして、七竅を穿つて混沌を殺し、鬚を附け足を添へ、金粉を置きて、街ひしものならむ。越人曰く、貞享式、白馬經、二十五條の

傳、東花式等皆汝支考が偽作也。翁直筆に違はぬ筆にて書て見せても偽也と。許六の言は考ふべし。越人が言は信すべき也。

蝙蝠の長閑につらをさし出して
路通

發句脇句は、此の一卷興行の時の作にはあらじ、蓋し二句の存したりしを本として、路通珍碩の附合ひ、荷兮越人の續ぎたるなるべければ、此句よりこそ此卷は起りたるなるべけれ。一句は前句の長閑なる春景に付きて、蝙蝠には聊か自ら謙下せる意も籠れるならむ。

駕のとほらぬ峠越たり
同

駕籠の通らぬ歩立の崎嶇嶮岨の峠道、巖窟石洞に蝙蝠の見えたるなり。大鏡曰く、攝津より丹波に至る驢こすり峠ならむと。

紫蘇の實をかますへ入るゝ夕ま暮
珍碩



山を越え里に下れば、既に夕暮となりて、村民の紫蘇の實を收めて蒲簀へ納れなどし、秋の日の短きに忙はしく働き居るなり。

親子ならびて月に物くふ
同

農家の夕餉、頑是無き子の促し立つるに、其母のおゝ道理なり、月も出たるほどになりたりと、おのれも共に食に就けるなり。

秋の色宮ものぞかせ給ひけり
路通

或は大塔宮、或は華山院の旅中の佛など、舊註は説けり。いづれにもそれと當りたる事あるにはあらず。たゞ宮方の秋の旅、一夜の宿を月下に得たまはんとする風情までなり。

こそぐられては笑ふおもかげ
同

若き人々の戯れあへる聲するを、宮も覗かせたまひけるに、罪も無くこそぐ

りあひて打笑ひ居たるなり。

うつり香の羽織を首にひきまきて

珍 碩

睦まじき男女の中、更けて歸りし男のよその移り香を其羽織に咎めて、疊みかけたる手を止め、これは餘所の美しき方のたゞませたまふべき筈と拗ねて優しく睨めば、何この美しきを外にして何處に美しきが有るものぞ、と領のあたりを突いてこそぐるを、其の羽織を領の下に巻きて逃げながら笑ふ佛の美しきなり。かく解さでは、前句の笑ふおもかげといふ語、男には似合はしからねば、自他叶はず。されども羽織を首に引巻きてといふ語は、女には似合はしからねば、これを女にこそぐられたる男なりとする時は、前句の笑へる者も男とせでは、自他叶はず。別にまた男の友達同士、廓がへりの朝の戯としても解すべく、また廓の後朝の癡話としても解すべけれども、いづれにしても少しづつ無理のところあり。一句聊かふつゝかなり。

小六うたひし市のかへるさ

同

前句、羽織を首に引巻きたると男見て、其の實體ならぬ蕩兒肌のところを附けたり。小六は美男にて伊達者なりし馬おひなりしといふ。小六節とて流行したる歌あり。小六ついたる竹の一枝、小六、本は尺八、中は一笛、小六、すゝ一は、ホ、ホン、ホ、ホン、ホ、ンホ、ノンヨ、ジョンジヨ、ジョンジョン、じよろ衆の、ノンカ、イヤカ、カ、ンカ、ソレソレまことに、ノホンホホーさして、筆の軸たけし、ころく。の類なり。市の歸るさと云へるに其人柄知るべし。

鮠釣のちひさく見ゆる川の端

路 通

鮠ははえ、訛りてはやといふものにて、川の小鱼なり。前句に都ならぬ風情有り、鮠釣る人の小さく見ゆる川を眺めながら諷へる歌も少しは調子はづれの田舎訛りあらむかとをかし。

念佛申してをがむみづ籬

同

神の瑞籬を拜むに念佛申すも、文盲質直の老人、遙か彼方なる男の殺生業を
樂むをば悲めるなり。

こしらへし薬も賣れず年の暮

珍 碩

貧者の神に頼る、また哀しむべし。

庄野の里の犬におどされ

同

庄野は東海道伊勢國の驛にて、庄野龜山とつく。前句の薬賣を膏薬賣り
て行商する者と戯れに見做して、此附句あり。拾遺和歌集卷六、みちの國の守
これともが罷り下りけるに、彈正のみこのかうやく遣はしけるに。戒秀法師。
龜山にいく薬のみありければとむるかたも無き別かな。此の詞書のかう
やくは蓋し香薬にして膏薬にはあらず、又龜山は列子湯問に見えたる巨鼈の

負へる山、即ち蓬萊山にして、伊勢の龜山にはあらねど、前句の薬は、いく薬にも
あらぬ賣れぬ薬なれば、竹齋物語の膏薬ぐらると見て取り、庄野龜山とつく
縁により、をかしき呼聲して賣りあるける者の、狗に吠えられたりとは作りた
るなり。戒秀の歌も俳諧調にして、此句もまた大に戲笑をほしいまゝにせり。
蕉風よりは少し前の頃の風體の句なり。然れども庄野の里と云出して、人を
して、はて庄野の里に何事の有るらむと首を傾けしめ、やがて手を拍つて笑を
發せしむるところ、兒戲の謎といふものに似て、狡獪の技倆罪も無き洒落なり。

旅姿稚き人の嫗つれて

路 通

嫗はうばと訓むべし。庄野は大街道にして、且つ伊勢參宮する者の通るべ
きところにもあれば、斯く思到りたるならむ。當嵌まるべき故事など有りや、
今何々の俳なりとも思ひ得ず。或は當時の人の熟知したる演劇淨瑠璃など
に、似通ひたるさま有るならむ。

花はあかいよ月は朧よ

同

曉臺曰く、一句の仕立、拍子附といふと。老女稚子の同行のさま見ゆ。

汐のさす縁の下まで和日なり

珍 碩

和日なりは、字に従ひて訓まばなぎ日とすべし。なぎ日はあれ日の反なり。但しなぎ日といひては季無し。山崎成美はニハヒと訓ましむ。にはひといふ語有りや、海にはといふ語は有れど、には日といふ語は有りともおぼえず、有りとするも、こも亦無季ならむ。和日の字面の義によらば、聊か無理なれど、のどかと訓むべし。のどかならば俳諧者流は春の季とす、前句に協ひて好し。永日、遅日、のどか、うらゝ、うらゝか、皆春季なれば、和日と書きて何とか訓みて、春季となる例も有るにや、一句を以て言へば、縁の下までうらゝなりなど云ひたし。蓋し源氏物語などに見えたるのどめ、のどむ、のどまり、のどまる、のどやか、のどけきなど、皆是れ和の字を當て、末を働かせて宜しき語なれば、此處も最

初は、和か、と有りけむを、その文字をば、草體の日の字に書誤り、又は刻し誤りけむと思はる。されどかゝるところに押付がましき言を爲すは厭はしきことなれば、疑はしきを疑はしとして、確徴を得んことを待つべし。句は月花の風情に富みたる晴れやかなる別寮なんどの縁の下まで春の大潮のさし來て、何とも云へず和らかに麗なる日のさまにて、およそ三月の景と見えたり。前句とのかゝり、解するまでも無し。

生鯛あがる浦の春哉

同

生鯛はいきだひなり。網せず釣せずして、鯛みづから浮み出で、浦人の手に入るをもて、特に生鯛あがるとは句作れるなり。下總國利根川にては河畔なる香取の神へ毎歳生鯉自ら身を獻じ、安藝國沼田郡沼田の海にては神功皇后の西征の御時より以來毎歳三月生鯛あがるなり。沼田の野路の沖なれば野路の浮鯛ともいひ、沼田、味瀉、鄰接せる地なれば、味瀉の浮鯛とも云ひて、詞花集卷九、花を惜む心をよめる、大藏卿匡房、春來ればあちかたの海ひとかたに浮

くてふいをの名こそ惜けれ、の歌あり。かゝることは味瀉に限らず、若狭國三方の海邊に、野田の戸といふところありて、六月に鯛自ら浮くを、方言にまどろ小鯛といひ、讚岐國綾の松山近き海にも同じ魚の自ら浮ぶことありといふ。前句は縁の下まで潮のさすところ、安藝嚴島神社廻廊のすがた有れば、同國の海つゞき野路あたりの浮鯛を附けて、浦の春景色のめでたく麗らかなるさまを詠せり。

此村の廣きに醫者の無かりけり

荷 兮

一境太古の如くにして人おのづから健なり。たま〜他郷の者、こゝに醫を求めて得ず、大に驚き又大に感ずるなり。

そろばんおけば物知りといふ

越 人

村のさま想ふべし。印判は庄屋に預けばなしの人々のみ住めり。

かはらざる世を退屈もせず過ぎ

荷 兮

天長地久、かはらぬ御世こそめでたけれ、誰か小賢しく退屈などせんや、饑餐飽眠、乃公が齡は幾つちやつたやら。

また泣出す酒のさめぎは

越 人

孤獨長命の、餘り福々しからぬ人と前句を見て附けたり。酔ひては述懐舊時の物語、覺めては黙々唯々、人の使役に甘んじ、酒の醒め際は涙、やがては泣寢入、おとがひ瘦せて、眼に力無く、宜しくもあらぬ帷子を二十八年も着る人なり。他人は評して曰く、死んだら宜からうに。

眺めやる秋の夕べぞだゝひろき

荷 兮

前句は卑しきを、此句は聊か轉じて高くしたり。眺めやるの五字、まづ氣象を變へたり。左遷謫居の人、少しは詩歌の心もあるなるが、秋の夕の暮れ行く

さま、よろづの景象、皆薄墨色に消去らんとして、天地いたづらに廣莫たるに、堪へ難き淋しさを覚え、酒は愁人の腸に落ちて、却つて爲る漣々の涙と、思はず泣出したるなり。眺めやるの五字、だゝ廣きの五字、作者幾度か鍛錬したりけむ、讀む者等閑に看過せずんば、前句とおのづからに能く附けるを知らむ。

蕎麥眞白に山の洞中

越人

薄墨のゆふべ淋しく眺めやりたる眼路の果に山の段畠の蕎麥の花のたゞ白々と暮れ残りたるなり。

うどん打つ里のはづれの月の影

荷兮

藁屋の中にこと／＼といふ麵棒の音、家はそこに盡きて疎林の霜に月光流るゝあたり、見透せば山の洞中に秋蕎麥の眞白なりしなり。

すもゝ持つ兒の皆裸むし

越人

里のはづれは村童等の遊び場、李子は六月の季なり。前句を饅飩冷麥など打ち、駄菓子時の瓜菓物など置く小店と見て、夏の夕月に猶ほ裸にて戯れ居る金時怪童丸どもを附けたり。裸蟲と云へる語を下したるに、其の兒童等のさま見えたり。

珍しやまゆ煮る也と立とまり

荷兮

裸蟲と云へるは都の人の笑評にして、其人繭煮るを見も習はねば立留まり見たるなり。裸蟲と裸蟲ならぬ蠶繭との對照をかし。

文珠の智慧も槃特が愚痴

越人

文珠は正しくは曼珠室利といふべし。諸經に法王子と云ふ、大智大徳、王の太子の如くに無雙なればなり。槃特は槃特迦に同じ。婆沙論百八十に、槃特鈍根にして、其兄にたゞ僅に四句の一伽陀を受くるに、四月を過ぎて猶ほ通ずるを得ざりしことを記せり。前句に珍らしやと歎せる口氣あり。此句、繭を

烹、絲を抽くにつけて、都人の其事を問ひて、賤が手業ながら其智及ぶべからざるものあるに感じ、成程成程とは云へど、猶ほ隈々までは解しかぬるに、自ら愚なりとも思ひ居らねど合點の惡しきに、文珠の智慧も槃特が愚に等しと、戯れ氣味に心中自ら省み嘲るなり。文珠の智慧槃特が愚癡といふ辭は世諺なり、こゝに作り出したる語にはあらずも文字のみ作意なり。

なれ加減またとは出來じひしほ味噌

荷 兮

なれ加減は熟し鹽梅といふことなり。ひしほ味噌は重言に似たり、今云ふなめ味噌なり。僧家の食とは限らねど、葷腥を禁ずる故、僧徒多く此類の物を造る。槃特は愚鈍なれども、一偈四ヶ月を過ぎて記する能はざりしながら、後には數息觀を佛より學びて羅漢果を得たること、首楞嚴經等に見え、取りどころ有りし者なり。前句、文珠の智慧も槃特が愚に及ばざる時ありといふやうなる語氣あり。ここには平生學問才器の劣れる僧の造りたるひしほ味噌の、復有るまじく善く熟れて美味なるを、文珠が智慧も槃特が愚癡に及ばざりし

と、負惜褒めする寺裏の戲言を附けたり。

何ともせぬに落る釣棚

越 人

偶然に釣棚の落ちて、ひしほ味噌の瓶の破れたるに、惜むべし、なれ加減またとは出來まじものをと、殘惜がるさまなり。

しのぶ夜のをかしう成て笑出す

荷 兮

下品の戀なり。忍ぶ闇夜に釣棚落ちて、自らもをかしくなりて笑出すなり。荷兮は演劇めき小説めきたる趣を立て句を作ること、を好めること、再三既に言へり。此句も夜這に棚の落ちたる作意、人をして一噓を發せしむ。此句有りてより百何十年にして、十返舎一九、膝栗毛の中に、同じ趣に輪をかけて、をかしきさまを書けり。古は賢愚相距ること三十里といへり、荷兮の才、一九に先だてること百何十年、荷兮もまた逸物なり。呵々。

逢ふより顔を見ぬ別して

同

同じく下品の戀なり。逆附なり。逢ふより直に顔を見ぬ別、逃げられたることを知りぬべし。こゝを侍従と平仲との佛として説かむは當らず。

汗の香をかゝへて衣を取残し

越人

前句は、忍ぶ夜の句に對ひては女の顔を見ず男の歸りたるなるを、此處には、男の顔を見ずして女の去りたるを取りて、此句を附けたり。源氏物語、帚木の卷の末の方より、空蟬の全卷にわたりての事にて、空蟬の君、源氏の忍び入りたるを知るより疾く退り出でたる佛なり。本文に曰く、斯る氣色のいと香ばしく打匂ふに顔を擡げたるに、ひとへ打掛けたる几帳の透間に、暗けれど打身じろぎ寄るけはひ、いと著し。淺ましく覺えて、ともかくも思ひわかれず、やをら起出て、生絹なる單衣一つを着て、すべり出でにけり。夏の暑き夜のことなれば、すゞし一つ着て出でしをば、汗の香をかゝへて、とは句作りしたり。又

本文に曰く、彼の脱ぎすべしたりと見ゆる(空蟬の君)薄衣を取りて出給ひぬ。又曰く、有りつる小桂を流石に御衣の下に引入れ、大殿ごもれり。空蟬の君の急なることなれば小桂を遣して去りたるをば、衣を取残しとは作れり。此處の戀の三句、毎句變轉して、輪廻の氣味なく、しかも言葉のみの戀ならずして、情意の戀なるは、流石に荷兮越人自在ありて面白し。

しきりに雨はうちあけてふる

同

前句を六月の土用干に夕立の一ト風颯と來りたれば狼狽して取收めかねたると做し、三四句のねばりを一洗し去れり。人事人情の句打續きたる後にかゝる句を附くべきは、自然の事にして、自然なるが故に又附句の法ともなれり。大鏡に逢ふよりの句を侍従と平定文とおもかげとして、其は五月の二十日、さみだれかきたれて降りける宵のことなれば、此句其意を含めりと爲し、これを三句の渡りといふ、と云へるは宜しからず。何丸は三句の渡りといふことを、三句一情一事をいふこと、取れりと見えて、數句を一事情もて解する

こと毎々なれども、三句の渡りといふは然ることにはあらず。曲齋の非としたるは當れり。

花ざかり又百人の膳立に

荷 兮

あて違ひになりたる逆附なり。

春は旅ともおもはざる旅

同

伊勢の古市、大和の芳野などの大旅亭に、大勢一連の客の幾組とも無く、さぐめき立つて入り、其人達も旅ながら旅とも思はざる樂しき景氣なり。

(春の草の巻終)

城 下

鐵砲の遠音に曇る卯月哉

野 徑

一句は四月の若葉時に當りて天地滋潤煦育の氣に満てるさまを現はしたり。城下と題したるは、鍊武稽古の鐵砲にして、殺生賭的と聞做されざらむの爲なり、と何丸の云へるは、流石に前書の意を善く解けり。但し又是れおのづからなる事實にもありしなるべし。

砂の小麥の瘦せてはらく

里 東

鐵砲の稽古場、人稀に地瘦せて、海邊沙斥、免税畠の捨作りの麥あるに過ぎぬ大に廣きところなり。此句も字留りにはあらねど、難すべきにもあらず、甚だ宜しき脇句なり。はらくと下に置きたる、一段面白し。大筒の音、聞ゆるが如く、淡き鼠色の空の下に、ひよろく麥の動き、見ゆるが如し。

西風にますほの小貝拾はせて

泥土

52

風によりて貝の濱へ寄る寄らぬが有ることなれば、風の名に貝寄せの風といふさへ有りて、二月吹く西の大風をいふ。ますほは、まそほの轉訛にて、色の赤きをいふ。鴨長明の無名秘抄に、ますほ、まそを、ますうの薄の説あり。こゝにますほの小貝といへるは、それには關はらず、まそほといふべきを訛りてますほとは云へり。但し此訛も古きことにて、西行山家歌集下卷、汐染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあらむ、といへるは、赤きを云へること明らかなり。此句其歌に本づきて、前句におのづから海近きさまの見ゆるを、巧みに取離したり。色の濱は越前と云傳ふ。

なまぬる一つもらひかねたり

乙州

なまぬるは微温湯なり。一句はたゞ海邊家無き地のさまなり。

碁いさかひ二人しらける有明に

怒誰

夜を徹して碁を圍み、有明月白き曉になりて遂に諍論に及び、心まづくなりて、湯一つもらひかねしさま、逆附なり。しらける有明にと續けたるは、言葉の巧緻なり。

秋の夜番の物もうの聲

珍碩

前句、勤番長屋などのかたくな侍の争ひあふと見て、夜番の、何事か有りしやと、尋ね寄れるなり。

女郎花心細氣におそはれて

執筆

拾遺和歌集卷十八、内にさぶらふ人を契りて侍りける夜おそくまうできけるほどに丑満と時申しけるをきゝて、女のいひ遣はしける。人ごゝろうしみつ今は頼まじよ。良宗貞ゆめに見ゆやと寝ぞ過ぎにける。此事詳しくは大

53

和物語に見えたり。何丸は此句其佛なりと云へれど、一句のさま其事には似合はしからず。おそはれては魔はれてなれば、源氏物語、夕顔の君の、河原院にて、六條御息所の生靈かともおぼしきいとをかしげなる女に魔はれて、物語の本文にも、此の君いみじくわな、き惑ひて如何様にせむと思へり、汗もしとゞに成りて我かの氣色なり、といへるところを、女郎花心ほそげにおそはれて、と作りたりと云はんかた、當れるなるべし。夕顔の君は元來心弱くて物懼をする本性なるに、源氏に誘はれて、人氣少く、木立いと疎ましく物古りたる河原院に至りたれば、其夜に於て怪を見たるなり。時は恰も八月十六日にして、本文にも、氣近き草木などは殊に見どころ無く、皆秋の野らにて、とあり。されば折柄の秋草の中にもいと弱々しき女郎花に君を擬へて、心細げにと、情景併敘の筆を用ゐて、魔はれてと、其夜のことを結び言ひたるなり。物語には、秋の夜番の物もうの聲することなど無けれども、河原院荒果てたるにせよ、下家司シモガイシも居り、又本文にも、此の斯う申す者は瀧口なりければ、弓弦いとつき／＼しく打鳴らして、火危しと云ふ／＼、預が曹司の方へいぬるなり、とあり。其の火危し

危しと警め云ひ／＼、往くところをば、秋の夜番の物もうの聲として、こゝに夕顔の卷の佛を附けたるは疑ふべからず。源氏、伊勢、大和、狭衣、枕草子等の佛を用ゐることは、本式連歌以來の習にて、今の人より言へば、古く耳遠き物語草子の類を引用ゐること異様にも思はるべけれど、源氏等の物語草子の類は、連歌、俳諧連歌をもてあそべる人には、昨日の事、隣家の噂ほどに親しかりしなれば、少しの不思議も無きことにて、既に連歌新式抄に、源氏物語は大部の物なれば、三句すべし、但し同所は二句計すべきなり、と許されしほどなり。かゝることを知り居りて、俳諧連歌の中に、數々源氏、伊勢、大和の類の物語の佛の用ゐらるること有るをば、異まざるべきなり。

目の内おもく見遣かちなり

野徑

魔はれし其人の體を後附にしたるなり。夕顔の君、源氏に誘はれて河原院に入りし日、源氏、夕露にひもとく花は玉鉾のたよりに見えし縁キにこそ有りけれ、露の光や如何に、と宣へば、夕顔の君、光有りと見し夕顔の上露は黄昏時の空

目なりけり、と後目に見おこせながら仄に言ひたり。其のしり目に見おこせて、と本文に云へる、いと短き句ながら、夕顔の君の風情をよく現はして、其人の一種の眼の中のさまの凡ならぬ態を見せ、後段、源氏の君の言葉に、いと弱くて、晝も空をのみ見つるものを、とあるに照應して面白し。夕顔の君は元來嫻々としたる中に、いとおいらかなるところあり、目の内重くといへる、重くの一語、下し得て甚だ好く、いと確に其人をあらはして、しかも事情に粘り着かず、次の句の世界を窄くするやうのこと無くしたるは巧なり。すべて佛の句など、餘りに本據に粘り着きたるは、其一句は好くても、詩境隘窄して、次の句附け難くなる傾あるものなり。曠野集の、火鼠の皮の衣を尋ね來てといへる句、御有様入道の宮のはかなげにといへる句などの如し、次の句甚だ窘窮するを免れず。されば佛の附を爲す者は、元來佛の附にて、其の事實を傳へんとするにはあらねば、成るべく事實に粘り着きて詩境の隘窄を致すを避け、次句の自由を得せしむるを宜しとす。此句の如きは、確と前句を承けて、其佛はあらはしながら、次の句の世界を窄くするやうなること無く、病人とも老人とも大事謀議

の體とも、作者の感情工夫により如何様にも取做し得べし。芭蕉の附句など、おほよそは是の如くにして、次句の人、詩境の隘窄に困するが如きこと稀なり。野徑はさして人も稱揚せぬ作者ながら、此句前を承け後を啓くの點に於て、善く其體を得たり。

けふも又河原咄をよく覺え

里 東

前句を癆瘵の病人と見て、心任せに遊び居らせらるゝ者の體を附けたり。河原は京の四條河原にて、芝居輕口など、興行ものゝ類有りしところなれば、河原咄は芝居咄又は輕口咄など、云はんが如し。前句廣き故に容易に一轉したり。されど一句は摧けて卑し。

顔のをかしき生れつきなり

泥 土

河原咄の受賣する人をあらはしたり。但し目の内おもく見遣り勝なる人にはあらず。されど打越へ戻る氣味ありて、句作り宜しからず。

馬に召す神主殿をうらやみて

乙州

乗馬姿儼然たる神主をうらやみて肩肘張りちらし隨從する社家の顔をか
かして見るなり。是れ一解。乗馬の神主を羨みて、其神主の顔の今少し好か
らば宜しからむを似合はしからぬ醜貌なりとなり。又是れ一解。後解の方
よろしからむ。

一里こぞり山の下苅

怒誰

山の下苅は樹立を宜しくせんが爲なり。氏神の山の仕事に一里の惣出神
主殿も馬にて見廻らるゝを、村民どもの羨みて口々に噂するなり。

見知られて岩屋に足も留められず

泥土

山中の巖窟に棲止したる者の、多勢の人々の山の下苅の折から見知られて、
今は此處にも居り難くなりたりと歎じて去るなり。苦修の僧などの如くも

思はるれど、見知られてと云ひ、足も留められずと云へる言葉づかひの仕立柄
を味はへば、善からぬ事などして村内に居り難くなり、山中の洞窟に潛み居た
る者などならむ。苦鍊精修の道人ならむなど、思ふは、句の仕立柄を看徹せ
ずして、たゞ窟といふ一字に心の先走りしたる過に陥れるものなり。

それ世は泪雨としぐれと

里東

戀の句にして、前句は竊盜、奸通、引負ひ、梅毒の骨がらみ、癩病などの何れとも
定まらぬものゝ、たゞ洞窟に潛み居たるなるを、此處には戀の遣瀬無さに親里
をさすらひ出で、國境の山越に辛苦の涙、雨に行き露に宿り、悲しき思を身に負
ひて喘ぐ脱落者と定めたるなり。前句に窟とあり、こゝに涙とあるをもて、新
古今和歌集、卷二十、御嶽の笙の窟に籠りて詠める、日藏上人、寂寞の苔の岩戸の
しづけさに涙の雨のふらぬ日ぞ無き、といへるを引出で、其意とせんは非な
り。それ世は泪とある言葉づかひを考ふべし、おのづから分明ならむ。但し
日藏の歌を踏へて言へることは勿論にて、全く日藏の歌に關せずと云はゞ、そ

れも亦非なり。雨としぐれと、と列ね云ひたるは、涙の雨のふらぬ日ぞ無きといへる其涙に、しぐれの忽ち烈しく降りては又忽ち止む唯是れ雲の往來による涙を、並べて言ひたるにて、いづれにせよ涙は涙、高僧の涙、凡夫の涙、ふらぬ日無き雨、降りつ止みつするしぐれ、それを一ト束に、それ世は涙、雨としぐれと、と批判はせねど感歎して、古今聖凡を一句に云取りて、しかも缺落者のあはれを如實に現はしたるが、此句の心を苦しめたるるところにして、又味の存するところなり。里東も人の餘り稱揚せぬ作者ながら、砂の小麥といひ、此句といひ、一トふしありて面白し。

雪舟に乗る越の遊女の寒さうに

野 徑

雪舟はそりと訓むべし。雪深き寒國の遊女の體、憂き勤のあはれさ、雨の日、時雨の日、まことに涙の世なるべし。

壹歩につなぐ丁百の錢

乙 州

丁百は重百なり。九十六文をもて百文とするを省百といひ、百文をもて百文とするを重百または足百といふ。短陌といふ語もあれば、重百は長百なるべきにやと思へる人もあり。いづれにしても丁百はあて字なり。九十六文を百文と數ふるは、通例なる世に、奥州、越後などは猶ほ重百なりしなり。重百の錢といふ語、たしかに越の遊女といへる前句に附きたり。壹歩はおよそ十五匁ほどにて、錢壹貫は、貞享元年の頃、十三匁より十五匁までなりしなれば、此集の頃も大抵同じかるべし。さて錢を壹歩につなぐ所以は、曲齋は、一步は親方へ出す身の代、餘りは我身の内證錢と仕分くるなりと云ひ、曉臺は、親の法事か不幸かななどに行くとき見て香奠の錢なりと云へり。さまで深入りせで、たゞ雪舟の上の錢勘定、目寒げなること、見て可なるべし。

月花に庄屋をよつて高ぶらせ

珍 碩

よつては集つてなり、皆々してなり。月花は節々にと云はんが如し。前句錢勘定は村方の集錢なり。庄屋様々々と皆々云ひて高ぶり威張らせしと

なり。

黄染の鹽のからき早蕨

怒 誰

田舎臭き食物甚だ厭はしきなり。

來る春に付けても都わすられず

里 東

邊陲の地の春回りて、花洛の天の愈々戀しきなり。

半氣違の坊主泣出す

珍 碩

意は聞えたれど、卑俗にして下劣の句なり。後世月並調連句の風、こゝらより漸く起るといふべし。

のみに行く居酒のあれの一騒

乙 州

ひと騒は響なり。俗句なり。いやし。

古きばくちののこる鎌倉

野 徑

居酒にばくち、俗にしていやし。東鑑に見えたる四一、半錢、目勝等のことを引くにも及ばず、ばくちなどは古き地なればとて、古きが遺るものにもあらず。但し此句のばくちといへるは其類の刁徒を云へるにや。前句よりのつゞき、博の法よりは博の人として解かぬかた、宜しきに似たり。博打は其人をもいふ、博打うちは俗の重言なり。

時々百姓までも烏帽子着て

怒 誰

祭禮のさまなり。賭博に祭禮、古きに烏帽子、俳諧連歌も型にはまり來れり。

配所を見廻ふ供御の蛤

泥 土

隱岐の後醍醐帝、淡路の廢帝などの御佛を假り奉れり。大鏡に、碁子の蛤、淡路より出づれば、淡路の廢帝と定めたるは、あらずもがなの談なり。碁子の蛤

は日向より出づるが佳品なり、何ぞ淡路と限らんや。淡路の廢帝は餘り古過ぎたり、必ずしもそれと指定めん由は無きなり。

たそがれは船幽靈の泣くやらむ

珍 碩

船幽靈は何處にても言ふことなれど、特に長門の海に多きよし云傳へたり。されば檀の浦に引かへて附けたらむかと何丸は説けり。但し檀の浦と定むるにも及ばじ、たゞ邊海の寂しき郷なり。

連も力もみな座頭なり

里 東

力は力と頼む者なり。目の見えぬ者の怖れ疑ふ態を附けたり。俗意の附方なり。

から風の大岡寺啜吹透し

野 徑

大岡寺は音讀すべし。水口に在り。新古今集、十訓抄等の記すところとは

異なれども、俗傳に鴨長明發心のところと云へり。本尊は甲賀三郎が護持佛觀音菩薩なり。一句立は宜しかれど、前句へのかゝり、力弱し。大岡寺と座頭との間に何事かの交渉有りやと推察せらるれど、聞知るところ無し。たゞ單に前句の心細く寂しき體を、から風寒く吹く冬枯の色無き景に附做したるにや。

蟲のこはるに用叶へたき

乙 州

蟲の強るとは腹の冷えて腸の蠕動し、一種の痛を覺ゆるなり。から風のためなること言ふまでも無く、さる事も實に有るためしなれど、餘りきたなき句なり。

糊強き夜着にちひさき御座敷きて

泥 土

御座は筵のあて字なり。糊強き夜着に小き筵、わびしき木賃宿なるべく、前句とのかゝり分明にて、これも旅路の冷腹おこり、眠りかねたる態もつとも

はあれど、附意は一句前へ戻り、同じやうなる情にておもしろからず。且又蟲こはるに糊強き、重複冒犯、強ひて咎むべからざるにせよ、好ましからず、自在轉變の働き鈍し。

夕への月に菜飯嗅出す

怒 誰

留守せるもの、臺所の棚搜し仕たるなり。この句、冬の季なり、菜飯も大根菜飯なりと曲齋論じたり。さもあるべし。惺庵が季を定めがたとしと云へるは精を欲して却て麤に落ちたり。

看經の嗽に紛る、咳氣聲

里 東

咳氣聲は風邪聲なり。前句を小き野寺山寺の事と取り、臺所にて雑僧又は寺男などのわざと爲し、本堂にて住持老僧の嗽しながら咳氣聲して夕勤の看經するを聞きながら、彼の經の終らぬ間にと、わるさする體としたる滑稽なり。

四十は老のうつくしき際

珍 碩

源氏物語、若紫の卷。たゞ此の西面にしも持佛居る奉りて行ふ尼なりけり。簾少し上げて花奉るめり。中央の柱に寄り居て、脇息の上に經を置いて、いと惱ましげに讀み居たる尼君、たゞ人と見えす、四十餘ばかりにて、いと白く貴に瘦せたれど、顔つきふくらかに、眉のほど、髪の美しげにそがれたる末も中々長きよりも、こよ無う今めかしきものかなと哀れに見給ふ。是れ源氏の小柴垣より覗き見たる紫上の祖母の狀なり。此句は前句の看經する人を其の尼君と取做して、本文により、四十は老の美しき際と、未だ全くは老枯びぬ體を附けたり。但しもとより戀の句にはあらず。

髪くせに枕のあとを寢直して

乙 州

うしろ附に容儀を亂がはしくせぬ身だしなみ宜しきを附けたり。これも戀の句にはあらず。

酔を細目に明て吹かるゝ

野徑

ほろ酔のまどろみ、寝直して復うとくくと、熱き耳に風のそよ／＼を快しとする態なり。一句立好し。

杉村の花は若葉に雨氣つき

怒誰

杉村はあて字にて杉のむら生したるなり。前句へまことに風情好く附きたり、一句立も好し。これを評して、雨は前句に縁無しといへるは、蕉風の附方を味ひ知らぬのみならず、すべて詩歌といふものを糊やら膠やらにて固く着くものゝやうに思へるあやまりなり。前句の人の體、此句の境のおもむき、如何にも好く映りて宜しきなり。

田の片隅に苗のとりさし

泥土

とりさしは取残しなり。舉白集のかへりみる山田が原はほのかにて残る

早苗や杉のむら立、といへる歌を引きて釋けるは、要無きことなり。舉白集の歌は比擬に近く、此句は前句に應じたる實景なり。此句と前句とは山田が原のほのかなるよりは、雨氣にくつきりと色鮮やかなる一幅の好畫なり。此卷惡句俗句凡句卑句も多かれど、酔を細目より三句甚だ振ひて、掉尾の勢、人をし
て喜ばしむ。

(鐵砲の卷終)

龜の甲烹らるゝ時は鳴もせず

乙州

舊解に曰く、吳の孫權の時、永康に人有り、山に入りて一大龜に遇ひ、即ち之を束ねて歸る。龜便ち言ひて曰く、遊ぶこと時を量らず、君の爲に得らると。人甚だ之を怪み、載せ出で、吳王に上らんと欲す。夜越里に泊し、船を大桑樹に纜ぐ。宵中に樹龜を呼んで曰く、勞せる乎元緒、奚事にして爾るや。龜曰く、我拘繫されて、方に烹臠せられんとす、南山の樵を盡すと雖も、我を潰す能はざらん。樹曰く、諸葛元遜は博識なり、必ず相苦しむるを致さん、我の如きの徒を求めしめば、計いづくにか薄かむ。龜曰く、子明多辭する無かれ、禍將に爾に及ばんとす。樹寂として止む。既にして至る。權命じて之を煮さしむ。柴を焚くこと萬車なれども、語ること猶ほ故の如し。諸葛恪曰く、燃すに老桑を以てせば乃ち熟せんと。獻する者、仍つて龜と樹と共に言へることを説く。權登

ち樹を伐らしめて龜を煮るに、立ちどころに爛る。今龜を煮るに猶ほ多く桑薪を用う。野人故と龜を呼んで元緒と爲す。此の故事を用ゐて句を爲せりと。蓋し非なり。桑薪烹龜の談は宋の劉敬叔の異苑に出づ。異苑十卷、多く神怪を語るの古書にして、唐人以來、時に詩詞の用となること有れば、辭典とは云ふ可からず。同じ事は又梁の任昉が述異記にも出でたれば、人の知ること稀なる故事とも云ふべからず。然れども誰も知りたる際の事なりといふにもあらず、我邦の歌、連歌などにも採用ゐられたる例も無きやうなり。作者果して異苑の故事を用ゐて此句を作りたりや、疑ふべし。且又烹らるゝ時は鳴きもせずといへる一句に、柴を焚くこと萬車なれども語ること猶ほ故のごとしといへる本文、相應せざること甚だし。口は禍の門、舌は禍の根といふ意に一句を解きたるも、句の仕立柄にふさはしからず覺ゆ。おもふに故事の引過りなるべし。こは然る耳、遠きことにはあらで、誰も知りたる莊子の龜の事を踏へて一章を仕立てたるにや。外物篇に曰く、宋の元君夜半にして夢む、人あり、髮を被りて阿門を闕ひ、曰く、予は宰路の淵よりす、予清江の爲に河伯の所に

使せるに、漁者余且といふもの予を得たりと。元君覺めて、人をして之を占はしむ。曰く、これ神龜なりと。君曰く、漁者に余且といふもの有りや。左右曰く、有りと。君曰く、余且をして朝に會せしめよと。明日余且朝す。君曰く、漁して何をか得たるぞ。對へて曰く、且の網白龜を得たり、其の圓きこと五尺なりと。君曰く、若の龜を獻せよと。龜至る。君再び之を殺さんと欲し、再び之を活さんと欲す。心疑ふ、之をトせしむ。曰く、龜を殺し以てトせば吉と。乃ち龜を刳る。七十二鑽して而して遺筭無し。仲尼曰く、神龜能く夢に元君に見ゆ、而も余且の網を避くること能はず、知は能く七十二鑽して而して遺筭無きも、刳腸の患を避くること能はず、是の如くなれば則ち知も困する所有り、神も及ばざるところ有るなり云々。此龜は刳腸されて死したるにて、烹らるゝといふの事無し。されど夢に元君に見え、余且予を得たりといふものは、其の救はれんことを欲せるなり。故に元君も再び之を活さんことを欲したりしなり。而も其の殺さるゝに當つては、一聲をだに發する無し。前には夢に言ひ、後には終に黙す。鳴きもせずと云へる、も文字を味はへば、元君の夢に入り

し龜のかた、一句の姿に應じて、孫權の前に烹られながら物言ひし龜のかた、一句の仕立柄には協はず。宋の龜は初は悲しみ、後は黙し、吳の龜は初は傲り、後は爛る。一句の情、宋龜の方を踏へたるが如く聞ゆ。但し莊子によりて釋せんとすれば、烹らるゝの一語、支吾する有るを免れず、異苑によりて解せんとすれば、鳴きもせずの一語、支吾する有るを免れず。然れども俳諧は俳諧なり、たゞ古を述ぶるにはあらず、必ず作意あることなれば、古に依るも可、古に違ふも可、たゞ俳意ありて而して後に一句を成すなり。萬車の柴を焚いて烹られながら、語ること猶ほ故の如くなりし、吳龜の故事を用ゐて、鳴きもせずと作るも可なり、腸を刳られて死したる宋龜の故事を用ゐて、烹らるゝと作るも可なり、俳諧の作意、自由にして拘束さるゝこと有るべからず。作意は主人なり、故事は奴僕なり、要はたゞ如何なる奴僕を如何なる主人の用ゐて如何なる光景情感を他に傳へたるかを觀る可きのみ。此句は季無しにして、雜の句なり。雜の句は發句たること稀にして、七部集中、たゞ此の一句のみたまゝ發句たり。雜の句は地名等を詠込みたるもの多く、此句の如き純粹の雜の句は甚だ稀な

り。又雑の句は題畫詠物等の折節に成ること多く、此句の如き純粹の雑の句は甚だ稀なり。純粹の雑の句はおのづから觀念の句多し。此句一集の色取りとして一集の選には入りたるなるべく、觀念の句として一句の詮は立てたるなるべし。觀念の句としては吳龜の故事を踏へたりとするよりは、宋龜の故事を踏へたりとするかた、面白かるべし。既にひさごといへる集の名も莊子を用ゐたるを兼ねて思ふべし。且又雑の句は、本來たま／＼差當りたる事有りて一句おのづからに發し、季節のものを取入るゝ間無きところに全章既に成るをもて無季なるものなり。杖つき阪にてたま／＼落馬したることありて、其の突差の間に、歩行ならば杖つき坂を落馬かな、とは一句おのづからに發したるなり。四山といふ瓢こゝに在り、これに差當りて、物ひとつ瓢は輕き我世かな、と觀念の全章忽焉して成れるなり。酒のみ居る人の繪に差當りて、月花も無くて酒飲むひとりかな、と吟じ、貞徳宗鑑守武の畫像に差當りて、月のこれやまことのあるじ達、とは詠せるなり。すべて差當りたる事有り物有りて、節物を用ゐるに及ばず、直に詩想を發し、一句を成す、是れ無季の句の生ず

る所以なり。無季の句に地名の入りたるが多く、題畫詠物の什多く、觀念感思を述べたるが多きも、これが爲なり。此句はそも／＼何に差當りて成りたるならむ。おもふにわざと心構へしたる藥喰ならば、藥喰の句をものすべし、偶然得たる龜鼈の類を、食はむもあはれなり、食はざらむも惜むべし、と宋元君にもあらねど躊躇したる末、すべて龜鼈の類は取分け生を惜むものなれど、烹らるる時は鳴きもせず、彼も鼎の前に覺悟の死を諦らめたる状あるを感じて此句有りたるなるべし。曉臺曰く、龜は靈智ありて長壽なるものなれど、烹らるる時は鳴きもせぬなり、まして人として死生を悟らざるは如何にぞや、慙づべきなり、といふを一句の餘情にして作りたり、と曉臺の説けるは、や、説破に過ぎたりと雖も、まことに然る風情も言外には籠れりと覺し。吳龜の故事を踏へたる句としては、たゞ多言饒舌を戒むる意の句となりて、作者空想的に龜を捻出し、譬喩的に龜を借來れることゝなりて、教訓としては可なるも、俳諧としては妙無く、差當りたることも無くて雑の句を作りたることゝなるなり。宋龜の故事を、其の救はれむことを求めたる哀れさの思出らるゝまゝ、下に踏

へ用ゐて、差當りたる龜を煮て喰ふにつけ、感思を一句に發したりとせんかた、俳諧の本意、雜の句の由つて出づる所以にも叶ひて、句もまたおもしろく取らるべきならむ。龜の甲、あまり甚しき俗言のやうなれども、古今六帖、卷三、古川の底のこひちにありと聞く龜の甲とも知らせてしがな。夫木抄、卷二十四、ながれては龍田の川の底にすむ龜のかふとも聞かば頼まん。皆甲と斯うとを假名違ひながら掛けて用ゐたり。龜を龜の子、龜の甲などいふことは、元より俚俗の常習なり。此句も恐らくは甲と斯うとを掛けて用ゐる居れる底意あるならむ。さて長々しく斯くは解けるながら、舊釋より引つゞいたる葛藤を抛下して、天地清閒の好風光裏に端的の感を云はゞ、此句は實は龜の一種たる俗にスッポンといへるを煮て喰ふ折柄、龜の斯う煮らるゝ時は鳴きもせずと泣くに掛けて、諠浪笑傲いかもの食の曠達ぶりを其儘に現露せる俳諧なり。泥龜は寛永あたりより、煮ても、さしみにしても、吸物にしても、人の喰ひたる證あれど、元祿の頃より徳川氏末年まで、猶上品なる食饌とはせられず、四足のものなれば、之を食ふも人に憚り、之を煮るも潔癖者は室に於てせず、之を鬻ぐも下

手談義に記したる如くに江戸は柳原の長堤にあやしき大道易者など、ならびて煮賣店を張りしなり。大阪は別なれど、鰻、鯪、泥龜の類、猪、鹿の類、内々は其の美味あるをもて男女とも之を賞したれど、其物はあさましく卑しきものとして斥けたる此の世態を了知する時は、此句の傲然として藥喰とも云はで敢て龜を煮るとしたる味をも解し知るべく、又次の句の趣をも悟り知るべし。スッポンは葡萄牙語の轉訛かなど云へる説もあれど、其形のすぼりとせるより云出せる稱なるべく、どんがめ、だんがめ、即ち是れすつぼんにて、古き騒ぎ戯るる遊びの歌の、すぼん坊や、すぼん坊腹立や、面憎や、池のどんがめなりやこそさゝの相手にヤレコレすぼん坊や、といへる、すぼん坊の語の轉じ略されてスッポンとなりしこと猜知すべし。龜の鳴くことは、すつぼんの時をふくといへる諺の、龜毛兎角の類の如くに絶無を示す意なるにも徴して、人皆有るまじきことのやうに思へり。されど龜鳴くは春の季題なり、又多く鼈を商へる者に問糺せるに、其人曰く、すつぼんも亦微しく鳴くなり、全く鳴かざるにはあらずと。新撰六帖、卷三、川こしのみちのなかちの夕闇に何ぞときけば龜の

鳴くなる、爲兼卿の歌なり。漢の焦氏易、乾之井に、鼃鳴岐山、鼃應山淵の句あり。又漢の崔瑗をして、數術天地を窮め、制作造化に倅しと稱せしめし張平子の應、間に、鼃鳴して鼃應する也の句あり。鼃鳴鼃應は漢時の諺なる如し。鼃鼃の類果して鳴くか、鳴かざるか、魚にも淡水にはぎゅう、鹹水にはぎちなど、鳴くと云はゞ、鳴くとも云ひつべければ、鼃鼃の類も鳴くこと有りや、未だ之を詳にせず。蚯蚓は其の鳴くの故を以て歌女と稱せらる。然れども實は鳴かず、鳴くものは、螻蛄にして、蚯蚓にあらず。蚯蚓鳴かずして、鳴くとせらるゝの事あり、鼃鼃亦鳴かざるも、鳴くとせらるゝの事ありて、而して爲兼卿の歌あるか。俚諺と古歌と、何ぞ相反せるや。將又雞鳴の時を報ずるが如くにこそ高唱はせざれ、鼃も水澤の間、暮夜寂寥の時には、幽韻を發すること實にこれ有りや。爲兼卿の歌を考ふるに、吳龜宋龜の故事を詠せりとも思はれず、たゞ是れ即事寫實の什なり。伴蒿溪の閑田耕筆卷三に記す。龜の看經といふこと世に傳ふ。おのれは正に聞きたり。誠に程拍子よく、音の堅き鉦を打つごとく、初は雨だれ拍子にて、次第に急に、俗に責念佛といふごとし。又鼃をすほんといふも其

鳴聲によれり、是は間遠にすほんといふ音、夜に及びて聞けりと。是の如くば、鼃は正に鳴くなり。されどすつほんは、鳴聲によりて名を得たりといふの説の如きは、取り難し。延寶八年の田舎句合、何を音にすほん鳴くらん五月闇の句に、芭蕉の判詞に爲兼卿の歌を引けり。此句泥龜を食ふにつけて、古歌の鼃鳴くとあるを、思寄せたる作なること論無し。禽の將に死せんとするや、其聲悲し、物皆命を喪はんとするに、臨みては悲鳴する例なり、まして長壽を稱せらるゝ、鼃の烹らるゝに當りては、定めし悲み鳴きもすべきに、鳴きもせざるなり、と作りたる此句の事實は、明らかに當時の藥喰といへることながら、藥喰とも云はで、世の好ましからぬことにするに、關らず、打付に鼃を食ふことを云へるところ、蠻氣ありて、自然味饒く、且すつほんとも云はずして、世の神靈長壽のもの、やう云做す鼃と云へるに、任誕不羈のを、かしみあり。吳龜宋龜の故事などにかゝはれる如き句のふりならず。

牛糞は薪に代へて物を煮るべし。我邦にては草木などのみを用ゐる例なれど、支那にては滿蒙の地など、今も猶ほ牛糞を燃料とすること稀ならず、印度にても、牛糞を以て積んで大聚と爲し、鉢を焼いて之を損じたること、尼陀那の卷三に見え、又比丘の露地に於て薪草牛屎糠樹葉を聚めて火を燃すことを佛の許したまへること鼻奈耶の卷九に見えれば、牛糞を燃料としたるなり。我邦にても邊土賤民はおのづから是の如きことを爲したらむ。前句龜を煮るなど、あさましき所行なれば、牛糞の燃料甚だ似つかはしくて、二句相應じ、莊列者流の曠放不羈、わざくれ三昧のさまを現じ、其中に何となく卑野にして荒涼なる趣を見せたり。牛糞の乾きて板の如くなりたるを燃すときは、火光閃き迸りて、一種の燃えさま有り、風の吹く音の寸辭下し得て甚だ妙なり、と支那泰山の下にて牛糞に暖を取りしことある人語れり。そは詳しく知らねど、ただ風の吹く音といへるに、淋しく廣莫として薄墨色の空を凧の渡るさま眼前に見えて好し。此句を山崎美成は、龜の故事として解せり。曰く、根本律に曰く、二鶩有り、一鼈と共に親友たり。天の大早に遇ひて、池水皆空しからんとす。

鶩東せんとす。鼈に向ひて曰く、好く自ら存活せよと。鼈曰く、汝去る、我何の依るところ有らむ、相將ゐて往去るべしと。鶩曰く、汝一杖を啣め、我口に咬みて共に他國に去らむと。空中飛過ぐ。人或は見えて曰く、空中二鶩共に一牛糞片を啣みて飛ぶと。鼈曰く、是れ牛糞にあらずと。口を開いて即ち落つ。この事を句に作りりと。さらば牛糞に風の吹く音は、空中飛行の時のさまと聞え、前句とのかゝり、餘りおもしろからぬやうなり。且又根本律といふものは無し。根本説何々といへる律は、十部に餘りて、總ては百六十餘卷有りと雖も、打任せて根本律とは云ふ可からず、略稱に従はゞ有部律といふべし、根本律のみ云ひては出處甚だ漠として考ふべからず。根本説一切有部毗奈耶か、根本説一切有部苾芻尼毗奈耶か。隨齋まさには有らぬことを云ふべくもあらねば、那處かに其の本文有るべけれど、鼈の牛糞と云はれたることを檢出せんため、に百數十卷を翻校せんことも物憂し。但し同じやうなることは、根本説一切有部毗奈耶卷二十八、闍陀比丘、同梵行者の勸説を斥けたる事の條に見ゆ。然りと雖も鼈の牛糞と見られたるの事無し。文甚だ長くして、前半は意同じ

ければ略すべし。後半に曰く、即便ち杖を覓めて、各一頭を銜み、鼈は中央を嚙み、空に騰りて飛去り、遂に一城市上に至りて過ぐ。時に彼の諸人、虚空中に於て鵝の鼈を持するを見て、各驚恠を生じ、共に相告げて曰く、仁等彼の二驚の共に一鼈を偷むを觀よと。鼈此聲を聞けども、默忍して語無し。又一城に到り、また市より過ぐる時、諸男女前に同じく嗟歎す。鼈便ち自ら念ふ、我更に幾時か此の辛苦を忍びて、長へに頸項を懸けて、口を護りて言はざらんと。即便ち報じて言ふ、我自ら去らんと欲せるなり、是れ偷まれ來るに非ずと。是の語を作す時、遂に便ち杖を失して地に墮落す。童子共に打つて而して命の終るを致す。下略。牛糞の事無ければ、鼈の事は有れども此句には關係無し。又同じやうなることは、舊雜譬論經卷下に見ゆ。但しこれは大鵝と鼈とにて、鼈は鵝に啄み啣まれて空を過ぎ、鼈しきりに問ひ、鵝遂に口を開きて答ふるより、鼈地上に墮つるなり。これも牛糞の事無し。よし三藏の中のいづくにか鼈の牛糞と云はれたること有りとするも、發句は異苑に本づき、脇句は佛典に本づきて、共に多言饒舌を戒むるの意なりとするは、教訓の上には宜しかれども、詩

歌の道にはおもしろしとも思はれぬなり。作者珍碩博學なるにせよ、古は俗人にして律藏を窺へば眼の潰るゝなど、云習はしたるなり、珍碩何ぞ律部を讀みて牛糞と鼈との故事を知らずでは解する能はざるが如き俳句を爲すことを敢てせんや。隨齋の解は思過しなるべし。或は曰く、伊蘇普物語に見えたる鼈と禽との事を用ゐたるならむと。然れども元祿以前に行はれたりと覺しき寛永本等の舊譯いそほ物語には其事無し。又或は曰く、古の俗、四足二足等を烹炙するには多く戶外に於てす、此句風の吹く音といへるに戶外のおもむきを見せ、牛糞といへるは其の田舎臭くて蠻野なる境趣を點出したるまでなりと。解は淺きに似て韻は却つて饒し。又是れ一箇の好解なり。

百姓の木綿しまへば冬の來て

里 東

字も木綿とあり、訓もきわたとは云へども、我邦には木綿をつくること少し、草綿と心得べし。草綿をきわたと呼べるは、蠶の綿即ち真綿に對して、植物の綿といふ意をもて呼習はしたるなり、植物をすべて、きといふは邦語の常なり。

草綿は八十八夜前後に種子を下し、盆前に綿を吹出さしむ。四早といふ説有りて、すべて早く蒔き、早く收むるを宜しとするものなれば、木綿しまへば冬の來てといへるは事實に遠きやうなれど、扱其の早く濟ますべきものも、事多き農家の何やら彼やらに追はれて、實綿ワタ又は繰綿クリワタを仕舞ふ頃には、はや既に冬の通りて、とは作れるなり。前句厩肥に寒風の吹く體なり、此句のおもむきおのづから味ひ知るべし。

小歌そろふるからうすの繩

探志

からうすは碓なり、たううすは磗なり、碓は踏臼、磗はすり臼なれば、物と用と各相異なれども、からと唐とは甚だ紛れ易き上に、碓をもまたたう臼と云ひ、磗をもから臼といふ人あれば、兩者相混じて、判別しがたし。たゞし此句のから臼は、碓なりや磗なりや。前人は碓なりと謂へり。碓は米搗臼なり、稀には上より下げたる力繩に縋りて身を浮かせて杵を下し、搗くことも有れども、大抵は鳥居様の横木に憑りて足を舉げて杵を下し、また其の柢、即ち俗に竿と稱す

る者の尾端を躡みて、碓嘴即ち杵を上ぐるなり。されば碓をもて此句のからうすと爲すときは、からうすの繩は上より下りたる力繩なり。又磗は普通すりうすなれども、磗をからうすといふところも有りて、日本百科辭典の如きは、農事専攻の人、からうすを釋するに、磗礮を以てせり。磗礮は穀を破り米を出すところのものにして、繩をもて横木の上に懸け、二人對坐し、力を併せてこれを運らすなり。磗に繩を用ゐるは常の事にして、二人協力して調子を合せ、交互に繩を牽き、肘木を動かす。是れ扱すり歌といふもの、生ずる所以なり。されば小歌そろふるからうすの繩といふ句の上より云へば、句中のからうすは搗臼にはあらで、すり臼なりと爲さんかた、甚だふさはし。言葉の上より云へば、辭典の如き解を爲す人も有るにはせよ、からうすとある以上は碓と爲さんを宜しとすべく、姿致の上より云へば、米搗歌といふも有るにはせよ、磗として、すり臼の繩を歌に調子合せて牽くと爲さんかた宜しかるべし。碓か磗か、邦語は混用し、つき臼かすり臼か、本文假字がきにして文字を用ゐあらねば、いづれとも斷じがたし。續猿蓑の、一石ふみし碓の米、沾圃はふみ臼なること分

明なれども、此句のからうすは不分明なり。假字がきは實に切なるところに其效有ることなれども、かゝる時は確もしくは礎、もしくは礮の字の下しあらばと思はる。言葉の混淆は如何にともしがたきことなり。但し粗ずりは秋の季なり、米搗は秋とは限るべからず、季より論ずれば、此句はおほよそ秋とおほしけれど、次の三句秋季なれば、必ずしも粗ずりなりとなさでも可にして、秋季とも決めがたし。

獨寢て奥の間廣き旅の月

珍 碩

秋の月夜に働き男どもの鄙ぶり歌聞きつゝ、大なる家に孤身蕭然たる枕邊さみしき風情なり。

蝸螂落ちて消る行燈

正 秀

句意分明なり、句柄も好し、附味も好し。

秋萩の御前に近き坊主衆

及 肩

前句の行燈は室中の行燈なるを、こゝには路次行燈としたり。猿蓑の夏の月の巻草むらに蛙こはがる夕まぐれ、凡兆、露の芽とりに行燈ゆりけす、芭蕉とある其の行燈に同じ。大名なんどの茶席の秋の庭なり。前句のさま、拙く附けなば、おほよそはたゞ淋しくて旅の月の句と同じやうなる境に墮つべきをおもふべし。苦案の句なるべし。

風呂の加減のしづかなりけり

野 徑

舊解多くは浴場の風呂となせり。坊主衆浴場の風呂加減など試みるものと思へるにて、侯伯の奥むきを知らぬものゝ推察なり。侯伯の浴室は婢女の管するが多きなり。此句の風呂は浴室の浴槽を云へるにはあらず、風爐の假借に呂字を用ゐたるなり。風爐は茶の湯の用にて、茶會を催し客を請せぬ平常時にも、次の間、または他の便宜の室に備へ置きて、時の需に應ずるやうにす。坊主衆これを管するは常式なり。前句の御前に近きとあるに附けたる意、おのづから明らかなり。禁中には坊主衆無けれども、同じやうなる需用に應ずべ

き設備ありて、これを御湯殿といふ。風呂といひ、御湯殿といふとも直ちに其を浴槽浴室とおもふが如きは、身分の差より、下品の生活を以て上品の生活を妄猜するといふものなり。

鶯の寒き聲にて鳴出し

二 嘯

飼鶯の初音を出したるなり。富貴の家の奥のさま、優雅おもふべし。風爐は爐ふさぎより爐開きまでの暖き間のものなれば、いぶかしく思ひもすべけれど、そは茶の會の式のことにて、前句茶の會にはあらず、茶の會の用ならぬ風爐に季は無ければ、疑ふべきにあらず、たゞ是れ良き家の整ひて、しとやかなる態の前句よりの映りなり。

雪のやうなるかますごの塵

乙 州

かますごは梭魚即ちかますの子といふ義にて名を得たるかと思はるれど、必ずしも梭魚の子にはあらず、其の本末不明なるをもて、如何な子、いかなごと

いふものなり。或は曰く、蒲簣に容れて他方へ送り出すをもて、かますごといふと。其の早春のものは長さ一二寸、白くして雪の如し。須磨明石邊にて獲るなり。此句によりて想ふに、元祿の頃は鶯の摺餌の料とすること、猶ほ今の鮠を用ゐるがごとくなりしにやあらむ。句は其の纖塵を撰去るところなり。

初花に雛の卷樽居るならべ

珍 碩

卷樽は重輪シゲワの樽にて、餽物する時などに用ゐらる。前句物やさしき景にて、幼女のするわざと聞えたれば、初花に雛遊びの卷樽居列べて、無邪氣なる兒等のさゞめき遊ぶさまをあらはしたり。

心の底に戀ぞありける

里 東

前句は童女等の遊べるさまなるを、こゝには其を其儘に女子生れし家の初の上巳に餽物齎らしたる使者の、數々居るならべて口上いふところと取り、さて其の應對に出でたる侍女など、日比行通ふ間の家の事とて、心の底に戀ぞ

ありける若き同士の眼來眉去、優しき思のほの見ゆるところを云へり。前句を味はひ、其の景氣を領すれば、此句おのづからにして解すべし。一句は妙といふほどにあらねど、附味は心利きたり。

御簾の香に吹そこなひし笛の役

探志

後ろ附なり。翠簾の中、玉人の影動きて、粉香脂氣の人を襲ふものあり。笛の役の者、心の底に戀ありて、そのためにチリタリの譜を過ちたりとなり。

寝ごと起きて聞けば鶏啼く

昌房

失錯を口惜く思へる餘りのおのが寝言に覺めて起きたれば、鶏鳴曉を報じたりと解せる者あり。又笛の役つとめし人の、御簾の香に心を動したるばかりに吹損ひしと口惜がりて、嘆語言へるに、驚き覺めたる人の耳立つれば、鶏鳴きしなりと解せる者あり。前解後解、自他の差ありといへども、いづれも通すべし。但し前解は曲折多く面白けれど、おのれの寝言に覺むるといふこと聊

か無理なり。後解は向はせ附といひて、さる附方も有る例なりといへど、前句と自他の轉換圓滑ならず、これも聊か無理に聞ゆ。一句ふつゝかにして宜しからぬなり、深く論定するに足らず、句ぶりも附味も幼し。

錢入の巾着下げて月に行

正秀

鶏鳴きて天や、白めば、錢入提げて有明月に立出でたるなり。田舎の商人宿より、宵勘定の濟ませありて、むく起に出でたるは、在々を巡りて何をか買出す小仲間なるべし。

まだ上京も見ゆるや、さむ

及肩

前句有明月かけて立出るを、去りがたき用事有りてのことゝし、其人北山の方へ次第に行きて、もはや大分歩きたらむと顧視するに、まだ上京も見えわたりて、然のみの道も過ぎず、たゞ四邊物靜にして襟に落つる曉の風、人まだ起きぬ秋の朝の漸寒きなり。

蓋に盛る鳥羽の町家の今年米

野徑

蓋はかさと訓むべし。椀の蓋などかさと呼ぶ習なり。鳥羽は志州の鳥羽にはあらず、山城國乙訓郡鳥羽里の鳥羽なり、城南神社ありて、下鳥羽祭九月の十日なれば、前句の漸寒といへるに應ずるを見るべし。今年米は今年成就の米といへるが義なれども、こゝには糶をいへり。糶は米の扁平なるよりの字にて、新穀の糯の猶青きを炒りて之を舂つき其殻を去れば、米匾平にして味甘美なり。炒りて製するをもて俗に焼米ともいふ。焼米は春の苗代時、苗代用にせる餘りの芽を萌させたる穀を以ても作れど、今年米といへば明らかに秋の焼米なり。蓋に町家の之を盛るといへるに、祭の日の秋めける賣物なること知るべし。前句を轉じて、京より東寺の傍を過ぎて下鳥羽詣りせることに爲たり。

雀を荷ふ籠のぢぢめき

二 嘯

ぢぢめきは小鳥の群鳴く聲なり。鷹に飼ふ雀などを籠に入れて持搬ぶに籠中にてぢぢめき鳴くをもて、後には其の籠の階圓にして長きをば、ぢぢめき籠略してはぢぢめきとのみも云ふやうになれり。こゝにはぢぢと鳴くところを云へり。鳥羽あたり、京離れたる田舎の景物、見ゆるが如く聞ゆるが如し。

うす曇る日はどんみりと霜折て

乙 州

霜折てといふ言葉いぶかし。霜下りてにはあらぬかと疑はるれど、霜の日は却て薄曇りなどせぬ勝のものなれば、さにもあらざるべし。霜柱の折れ摧けなどする微暖の日、どんみりと薄曇るにふさはしければ、霜折ては霜摧けての意なるべきにや、言葉づくり聊かふつゝかなり。どんみりはどんよりと云ふが如し。すべてに潤ありて、きはやかならぬをいふ。芭蕉の句に、どんみりと樗や雨の花曇り、といへるあり。語意考ふべし。一句はぢぢめき籠荷へる人のかく穩やかに静かなる日を行きて、ぢぢぢぢの聲の安閑たる中に聞ゆる

なり。小鳥を囿もて獲るに好き日なりといへる左江曲齋の解は、餘りに持つて廻りたることなり。よく前句の風情を味はふべし、殺生の遊に出たるにはあらぬなり。

鉢いひならふ聲の出かぬる

珍 碩

鉢は梵語鉢多羅の略、應糧器と譯す、佛道の乞者が施を受くるに用ゐるものなり。乞者人の門に立ちて施を求むるに、鉢々といひて、其の來りて施を待つての意を通せしなり。こゝに鉢といへるは、施を求むるの言といふこころなり。いひならふ聲の出かぬるは、叫化乞食の徒となりて、未だ日月を経ず、猶ほ羞かしくて聲の出ぬなり。空也上人の末流、十一月十三日より四十八夜の修行に、鉢たゝきに出づ。無常まなこの前に來て、火宅を出よとす、むれど、名利の心強ければ、聽いて驚く人もなしなど、誦す。皆是れ叫化の語なり。前句霜なり。此句霜月十三日近く、鉢たゝき猶ほ出はじめたる頃、今年はじめて其徒となりたる者の風情ならむ。

染めて憂き木綿袷の鼠色

里 東

木綿袷の鼠色なるは、浮世の花を棄てたる人の衣なり。初五文字、何となく鉢いひならはぬさま見ゆ。僧正遍照、うつぶし染の麻の袈裟なり、の歌を俳諧にしたる氣味あり。

撰あまされて寒きあけぼの

探 志

一句は不束なれど、人々多く立出づるに當りて、撰りあまされて残り留まるべく定められし者の打つぶやきて、人氣少くなりし曉天の寒きに家を守り居たるさまなり。前句をよく味はふに、葬または年忌などのさまとも聞ゆ。然聞きてかゝる句を附けしにやあらむ。

暗がりに薬罐の下をもやし付

昌 房

留守と定まりたる譜代の男、田舎の大家庄屋などには譜代男あるものなり

などの、朝まだきのさまなり。

傳馬を呼る我まはり口

正 秀

前句を驛路間屋場役人の、何人が有りて夙起する體と見て、此附句あり。我が廻り口は我が受取りたる方面の持口と云はんが如し。そこにて傳馬を出せと人の呼はるなり。

いきりたる鎗一筋に挾箱

及 肩

いきるは勢立ちて威張るやうなるを云ふ。挾箱は衣服の箱なり。傳馬を呼るは此のいきりたる侍の従者なるべし。

水汲みかゆる鯉棚の秋

野 徑

鯉棚は鯉を賣る家なり。店をたなといふも、商品を棚に置列べて人に見するよりの稱にて、又みせといふも見せ棚の略より出でたる語なり。水汲みか

ふるは鯉をして勢好からしめんために、秋の一字甚だ好し。前句の侍此家へ來れるなり。

さはくくと切籠の紙手に風吹て

二 嘯

切籠の燈籠のしでに風吹きては、門口より奥まで見え通りて清らに涼しげなる家のさまなり。紙手はあて字にて、燈籠の角々及び下よりしだれたる筋りの長々しき垂物也、流蘇也。さはくとは其の風に搖るゝ音にて、一句もよろしく、前句の鯉の水かふるといふに暑氣猶ほ残れるさま見ゆれば、此處に初秋の盆の景物の、しかも艶にして涼しげなるを取出して、街道に臨みて割烹する大きな家のいさぎよき體を現はしたる、寫實的にして、しかもおもしろし。

奉賀の序にもほのかなる月

乙 州

前句を寺の體と見て、その佛堂建立の奉加帳の序文にも見えたる如く、由緒ある境地の景色よろしく、松杉のむら立などに月ほのかなるさまたゞな

らず好し、といへるなり。寺に轉じて盆前の夕暮を示したる、巧慧なり。拙なりとする評は當らず。新古今集卷二十、觀心如月輪若在輕霧中の心を、權僧正公胤、我が心なほ晴れやらぬ秋霧にはのかに見ゆる有明の月。意の底に此歌有り。

喰物に味のつくこそ嬉しけれ

珍 碩

秋風人に快く、病患やうやくおこたりて、薄粥に梅びしほも口にうまくなり、心氣爽然として、念願にいそしまむとするなり。

煤掃くうちは次に居替る

里 東

重病後の人の態、眼のあたりに在り。

目をぬらす禿のうそにとりあけて

探 志

花柳の地の情趣に轉じて、氣むづかしき尊大なる客の座を動くことをいへ

り。巧なるに似て拙なる句なり。

戀にはかたき最上侍

昌 房

最上侍とは猶ほ田舎者のかたむくろなる武士と云はんがごとし。かたきは前句の嘘に反映して、正直堅固なるなり。最上は出羽なれど、別に最上侍何某に何々の傳統的戀物語などありしといふにはあらず、

手みじかに手拭ねぢて腰にさげ

正 秀

一句は立仕度なり。前句は戀の道に正直堅固なるを、こゝには色めかしきことなどに身を染めずして操履甚だ貞しきを云へり。

繩を集むる寺の上茨

及 肩

前句を傭はれ働く男のさまと見て、其用をあらはせり。上茨は稀なる辭にて不明なり。前人看到ること精細ならで、たゞ屋根葺くこと、又は在郷の寺の

普請など、思へり。板葺、土居葺、木賤葺等の語はあれど、上葺といふ語、今は關東あたりには用ゐられず。蓋し上家ウキヤぶきの略ならむ。上屋は建築物の上に設くる假屋根にて、寺社又は宜しき家の建築には必ず爲すことあり。又は素屋根ともいふ。素屋根には種々あれども、とより功成りて後は取除くものなれば、丸太を繩結にして形ばかりの屋根を葺くなり。寺の上茨、寺の字浮泛ならず、集むるといへるも、好く、前句も活きて聞えたり。

花の頃晝の日待に節衣着て

野徑

日待は日祭なり。晝のといへるは、十五日、二十三日、十七日等の日待、多くは夜を以て歡び遊べば、特に晝のとは云へるなり。節衣はせちごと訓む。祝ひの時の衣にて、絹などにはあらず、綿服なり。祭禮の揃ひの單衣、漁夫の大漁祝ひの上被りなどに節衣のおほよそを知るべし、但し新意異様をいふにはあらず。農村などにて正月に當りて人々の着る節衣をば正月ごと云ひしなり。こゝは花の頃に歸春の一日を嬉遊に費すべく節衣着たるを云へるにて、其日

は十五日にもあるべし。且那寺の建替か建増か、上茨打仰ぎ見て何かと世話振りたる風情趣ありてあしからず。

さゝらに狂ふ獅子の春風

二 嘯

さゝらは的確に何を云へるか定め難し。摺鳴らす竹のさゝらも、拍板も、四ツ竹も皆さゝらといひ、いづれも古樸の樂器なれば、こゝに云へるは其のいづれなるや確示し難けれども、こゝは古風遣れる田舎の神事などに獅子舞する體と心得て、およそ拍板四ツ竹の類と看做して可なるべし。節衣にさゝら、花の晝に和風、日まちに獅子舞、語辭情景、細かに取合せて能く映えたり。

(龜の甲の卷終)

角大師とは世俗に元三大師の鬼形折伏の相を現せる像の板畫を其の角あるによりて稱するもの是也。元三大師名は良源、慈惠大師とも云はる。天台宗の高僧にして、元享釋書等に其傳有り。大師本傳等に據る所あるにはあらねど、俗間に大師の鬼形の畫像を門戸に貼付して、賊難病災等を防ぐの符とす。句意を察するに、舊解の如くに、當時に在りて、田間の小路に角大師の畫像を竹などに挟みて立置き、苗代の苗の無難に生立たんことを祈求する習有りしが如し。然れども此句有るによりて此習有りといふ解の出でたるが如く、此習有りて此句出でしや否や覺束無し。且又實に其習有りしとするも、たゞ畔道に四五寸の角大師の影像の見たる苗代時のさまのみにては、一句甚だ穢にして、何のおもしろさも無し。おもふに角大師といふ語、當時何物かを擬稱

せるものにやありけむ。西行といへば遊歴の工人、達磨といへば無能の船客なり。辨慶といへば炙魚を串のまゝ挿しとゞむる藁束、閻魔といへば釘拔なり。角大師の影像は強竊の二盜を制すと云はるれば、苗代を護らんが爲にすなる或物を角大師といへるにはあらぬか。久延彦は山田のそほづなり、秋に當りて田を守る案山子即ち是也。苗代時にも案山子の鳥獸を禦ぐが如きものありて、それを角大師と俗稱せるが有りしにはあらぬか。或は又移動することの叶ふべき籬めきたるものありて、要なき人、穢ある人などの立入ることを遏むるをば、角大師といひしにはあらぬか。或は又倉の鼠には餌を與ふる道理にて、食物乏しき春の野鼠などに苗代田の穀種をあらされざらんが爲に何か鼠に與ふる餌料の其形の角大師影像に似たるものありて、それを角大師といひしにはあらぬか。信濃にては苗代の安きを欲する呪法として蛙の干したるを串にさして立置くといへば、それを俚語に角大師といひたるにはあらぬか。此等皆臆測の談にして何の據るところあるにあらねば他日の考を待つのみ。角大師鬼形の御影といふもの、抑何の據るところありて東叡山より頒

布し出せるや、これも亦甚だ疑ふべし。惠果阿闍梨所傳の弘法大師筆、象形梵文五點具足の阿字の形を誤り傳へしもの即ち是れ角大師御影といふものなりとの説、或は然るべし、御影のさまを考ふるに眞に阿字に似たるなり。阿字の訛形にせよ、良源の眞影にせよ、角大師御影といふものを、苗代防護の爲に畔道に挿置きし習俗あらば論無けれど、さらば苗代時といへる、時の字下し得て甚だ拙に、畔道の語も下し得て甚だ冗に、一句はたゞ苗代の角大師といへるのみにて足ることなり。太田蜀山の假名世説に、芭蕉の句なりとて、角大師井手の蛙のひぼしかな、といへるを記せるが、句の芭蕉が吟にあらざるべきは云ふまでもなし。但し蛙のひぼしに角大師御影の聯想は何人にも存するありて其の笑はしき句の何人にも會得されしを知るべし。井手の蛙のひぼしは見たること無けれど、百舌鳥のくさくきなど、角大師に似たるおもかげ無きにあらず。芭蕉の句と云傳へたるも奇異なり。そは兎に角に此の發句の角大師、たゞに角大師の御影を云へるのみとならば、さして佳趣ありとも覺えず、若くは當時の語に角大師といひて何事を歟何物をか何人をか指す意ありしな

らむ歟とは思へども確據を得るなし。後人の考を俟つ。

明ればかすむ野鼠の顔

珍 碩

野鼠の逃れ走りて一寸顧みたるさまを季節にかけて巧に云へり。前句とのかゝりもよし。扱又此句の味より云へば、前句の道といひ時といひ角大師といへるを思ふに、農夫のすなる結手拭の鉢巻して眞黒になりて炎天に勤め働くものをば、角大師のやうな、といふ俚諺など有りしにはあらずやと思浮めらる。農夫の眞に働くは、田中なり畔道にはあらず、耕耘の時なり苗代の時にはあらず、然るに能く農事に勤むる者、苗代時にも畔道を行きたもとほりて、夜露の玉苗の伸びを見めぐるは、吾が業を大切にすもの、有るべき常情なり。前句はそこを俳諧に道ひて、畔道といひ、苗代時といひ、土用最中にもあらば似つこらしくもあるべき角大師といふ語を翻つてそこに點出したるにはあらずやとも思はる。角大師御影は賊を禦ぐものなれば、苗代の靱を偷む野鼠の

其の角大師を恐れて逃れかすむところをおもしろく云ひたるならむ。かく
まで解せずとも發句脇句の解は濟むべきことなるが、思浮みたることを云は
で已まむもとて、贅疣に近きとは知らぬにあらねど記するものなり。

嘴太のわやくに鳴きし春の空

同

嘴ふとは嘴太き鳥なり。わやくは確としたる條理ありてにもあらず騒ぎ
立つるなり。明ればかすむ春の空、野鼠竄れ、嘴ふと鳥鳴立つたる、おのづから
なるさまなり。

かまへをかきし門口の文字

正 秀

鴉の啼ける場處なり。曉臺曰く、わやくといへるに、をかきしと云へるは響
なりと。

月影に利休の家を鼻にかけ

同

利休の家は千宗易が好みの式にて建てたる家といふが如し。宗易宗且よ
り石州遠州、近くは不白が輩に至るまで、茶人各其の好みによりて其式をなせ
り。曉臺曰く、門口と云ふに鼻にかけと云ひ、文字を月影に讀みたる體、皆句な
りと。曉臺等の響句の説、およそ是の如し。響句の説など、響句といふ稱をこ
そ口にせざれ、指を詩歌に染むる者誰か其旨を知らざらむ。談ずるに足らざ
るの事といふべし。

度々芋をもらはるゝなり

珍 碩

家を誇らせて芋を乞ひ、芋を興へて家を誇る。自ら満てりとするものは必
ず自ら缺く。世態笑ふべし。解に及ばず。

蟲は皆つづれくと鳴くやらむ

正 秀

舊解多くはつゞれを約の義として説き、圃の蟲の芋を惜みて興ふるなかれ
儉約せよと鳴くといふが如く解せり。甚だ非なり。約はつゞむるにて、つゞ

れにはあらず。つゞれは綴れなり、綴りさせといふ蟲の鳴音を興じて、皆といひ、重語にして、かく云へるなり。きり／＼すつづりさせとぞ鳴くなれどむらきぬもたぬ我はきゝいれず、素性法師。秋風にはころびぬらし藤袴つづりさせてふきり／＼す鳴く、在原棟梁。これはきり／＼すを詠めり。うちはへて機織る蟲のあるものをつづりさせてふ聲やなになり、加茂保憲女。これは蟲を指さずして聲や何なりと云へり。越後にてつづりさせと稱する蟲は京都のいとど、東京のこほろぎにて、古歌のきり／＼すは今のこほろぎなれば、種々の蟲皆つづれ／＼と鳴くとはあらねど、其處なる蟲の聲をつづれ／＼と鳴くやらんと云へるまでの一句なり。ただ是れ芋圃の蟲の聲々を云へるのみ、物を與ふるをつゞまやかにせよと蟲の鳴くやらんといふ作意など有りとするは、無理にして強解なり。

片足／＼の木履尋ぬる

珍 碩

心やすき同士の雑談に夜を更して歸らむとするに臨み、埒無く脱ぎすてた

る木履の片足／＼になりたるを尋ぬる土間の闇に、こほろぎ鳴くなど、得て有る實際なり。

誓文を百も立てたる別路に

正 秀

誓文を立つるならば立つるにてもあるべし、百も立てたるといへるに、鄙しく品下りたるさま明らかに見え、片足片足の木履尋ぬるに克く映りたり。

涙ぐみけり供の侍

珍 碩

前句は人柄も場處柄も卑しく、其態荒びて、はしたなく、田舎びたる趣なるを、こゝには其を引かへて、源氏の君の須磨へ遁れゆくに當りて、花ちる里の君、朧月夜の君、紫の上、其他の多くの人々に別るゝところと取りて、良清、惟光、前の右近の將監の藏人等たゞ五、六人御供して都を出づるに、昨日に今日のたがひ、歡會と流離との差、その人彼の方どもの思はれて、主も衰ふれば、臣も哀むさまをつくれり。詳しくは源氏物語須磨の巻を見て知るべし。まともに戀を描け

るにはあらねど、俳諧にては猶ほ是の如きをも戀の句とするなり。

須磨はまた物不自由なる臺所

正 秀

源氏の須磨に在りたる時を云へりとする解と、平家の一谷に據りたる時を云へるなりとする解と、兩説あり。後説はまだと讀めるなり、前説はこれはまたといふ意のまたと讀めるなり。未だと定まりたるにもあらずば、前説の方穩當にて、屋島より移りたる須磨の未だ物事整ひかねたりと強ひて解するにも及ばざるべし。臺所と侘びたるは例の俳諧なり。

狐の恐る弓かりにやる

珍 碩

大鏡に、須磨の内裡の時、狐裘を製せられむとて狩の催しあり、紀州雄の山の關守山口次郎が方へ弓を借りに遣りたまふ、然るに老狐これに先だちて山口が家に至り、御狩を止めさせたまふやうにと歎訴ふ、山口奇異の感をなし、永く家弓を藏して殺生を止む、此の故事なりといひ、婆心録もまた其解を襲げり。

よしなき解といふべし。須磨の内裡にて狐裘を製せられんとしたる事有りや無しや、覺束無し。物と、のはぬ庖厨に狐の覗ふ癖のつきて、數々魚鳥を掠めらるゝより、弓を借りて之を防がんとするといふまでの句意なるべし。狐のおづる弓として解するより上説の如き傳説を引出したるならん、鳥雀猿狐、皆弓を恐るゝなり、靈弓神弓の沙汰には及ばず、まして此句の狐は前句の臺處といへるより出來れる野狐なるをや。

月こほる師走の空の銀河

正 秀

此句にこそ前句の弓をば靈弓神弓として沙汰すべきなれ。一句何となく物すさまじく、風死して月凍り、天高うして星の橋寒う互る嚴冬の霜夜のさまたゞならず、狐妖の爲にやあらん、好からぬ節ある例刻なり。寢殿の屋の棟を屹と人の見上げたるやうの態も言外に見えてよし。

無理に居たる膳も進まず

珍 碩

無理に居るたるの語に、病患又は憂愁の情見ゆ。曉臺曰く、前句のすさまじき體より城門を思寄せて討死の前の宵の北の方のおもかげなるべしと。必ずしも然る事とは限るまじけれど、句の中の含蓄の傾向を道破せり。年忘れの宴に酩酊して最早御暇と立出て、天を仰いで更深けたるに驚くさまなりと、曲齋の解せるは淺俚にして、且又膳といへるを飯と解したるなるべく、つたなし。

いらぬとて大脇差も打くれて

正 秀

いらぬとてとは世を見限りてなり、打くれては無造作に與ふるなり。大脇差は其人の人柄を想はしむるに足れり。前句と此句とを聯ねて味はふに、豪爽の悲哀、悲哀も亦別趣有りて、おのづから詩境を現せり。

一人ある子も矮鶏にかへける

珍 碩

矮鶏はちやばと訓む。愛翫するに足るの小鶏なり。當時鬪鶏を飼ふこと

の大に行はれしは其角の筆にも明らかなることなるが、愛賞のために矮鶏など飼ふことも行はれたりとおぼし。一人ある子も人に與へて、大脇差も何も彼かも打呉れ、心にかゝる雲も無き月の、丸頭巾の隠居老人となりて、朝夕のたのしみ唯是れ矮鶏を愛し飼ふを事とせるところを言へり。情境無理なく轉換し得て興有り。

江戸酒を花咲く度に戀しがり

正 秀

江戸にも山屋の隅田川などいへる酒の早くより聞えたるはあれど、江戸酒といへるは田舎酒といへるに對したるまでの稱なり。灘の酒、吉備の酒といふが如くに、江戸にて醸せる酒と窮屈に解さでもあるべし。一句の上にて田舎に無事にて年々を安くおくれるさまあらはる。一人ある子は江戸奉公し居りて、おのれは注ぐべきところも無き愛を矮鶏の朝夕に注ぎて幽けく自ら慰むるものから、春來りて花咲くごとに、樂しき節物を田舎酒に賞するを飽かず思ふなり。吾が兒と矮鶏、江戸酒と村醪、年期奉公と花、樂しき時と淋しき思

絮説繁解せば妙は却つて逸し去るべけれど、熟咀細嚼せば味おのづから饒からむ。よろしき句なり。これを江戸奉公する子の給金をせびりて或は酒にし或は鶏にすることゝして釋せるは、矮雞を食ふべき雞と思ひ、奉公人の給金を多きものと思へるやらん、餘りなることなり。前句の子もまだかはゆきほどの齡の兒なりとは、看て取らぬにや。心は麤くして口は強き解なり。

あひの山弾く春の入相

同

間の山は伊勢内宮外宮の間の山をいふ。むかし其地に乞食の徒ありて哀しき曲を奏し、行旅の施を乞へり。これを相の山節といひて、今は纔に淨瑠璃の中に遺れり。文化文政の頃お杉お玉の相の山を弾きたる頃は既に眞を失ひて、三絃弾くといふことのみ遺りて、其謠も何を唱ふとも辨へがたし、と參宮圖會に記せり。相の山の本曲本歌は確知し難しと雖も、淨瑠璃中の相の山節によりて髣髴を得べく、又其の歌調の一例は、我に涙を添へよとや、夕べあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聽いて驚く人も無し、野邊よりあなたのものと

ては、血脈一つに珠數一連、これが冥土の友となる。といふが如く、僧徒和讃の風あり。但し上方唄の相の山は、これも少しは相の山節に依るところありて相の山の名を負へるなるべけれど、寒の師走も日の六月も、辛い勤に日をくらしやるか、顔に細りがかはいや見ゆる、といふが如く、七々調多くしてこれに亂調を加へたるもの也。曉臺の頃には參宮圖會の言へるが如く、伊勢の相の山節は既に得知れぬものとなりたりと覺しく、されば此句を釋して、花見の酒宴と見て、亂舞の體を、相の山弾くとは、唱歌も分らぬ三絃を弾くにたとへたり、但し入相頃の熟醉なるべし、と云へり。唱歌も分らぬ三絃を弾く爛醉の體と解けるは然る事ながら、前句を味はふに、心細げに少しは悲しき體もあれば、こゝは春の入相に花見酒の醉餘に偶然相の山の哀曲を弾じ出して、思はずも感傷の情の動きたる方に取りたき心地す。曲齋が參宮の様なりと解して、此邊は何處にも鐵砲酒は無いだらう、早く江戸へ歸らなくちや叶はねえと困じ入りたるなり、と云へるは、論するに足らず。

雲雀啼く里は厩糞かき散し

珍 碩

116

厩糞はまやごえと訓むべし。實の相の山あたりと見るも宜しけれど、相の山は餘りに賑やかなる參宮道なれば、たゞ是れ春の村里の景と見るも宜し。一句の仕立、少しく觀想の氣味有りて、雲雀は晴空に啼き、人は厩糞を扱ふといふところ、前句の相の山、彈く春の入相といへるに、感情の藕絲、織く連なりて響合ひ、中々おもしろき節あり。

火を吹てゐる禪門の祖父

正 秀

入道したる老夫の獨り家に在りて火をおこし居るは、若き男女の皆忙しく戶外働きなして居るなり。

本堂はまだ荒壁のはしら組

珍 碩

舊寺再建の功いまだ遂げず、歸依の老人の志篤きが出張り居りて、餘りはか

ばかしくは勢も無き普請小屋の片隅、又は勸化掛りの詰處などに罐子の下の火を吹き居るなり。

羅綾の袂しぼりたまひぬ

正 秀

前句を廣大なる伽藍の建立と見て、貴き女性の工事成就に念を懸けたまふところを附けたり。聖武天皇の東大寺御建立につけ、光明皇后の法華寺御建立ありし時のおもかげと解するは、あなぐり求めたる解なり。貴き女性の亡き君追福作善の爲の造寺にて、感懷衷に動きての落涙と、やすらかに看取すべし。

齒をいたむ人の姿を繪に書て

珍 碩

曉臺は前句に、泣きたまふ風情あるを齟齬を病みて惱み泣くとして畫のさまに轉じたりと云へり。曲齋は前句の貴女常に畫を好ませたまひ、特に美女の姿に妙を得たまふ様見ゆ、偕齒をいたむ美女と貴人にて畫を善くする人の

117

據有るべけれど未だ考へずといへり。いづれも古人の句を味はふに於て心切ならずといふべし。古の貴女にして畫を善くする者は、拾遺記に見えたる吳王の趙夫人あり、又元初に趙子昂の妻管夫人あり、猶ほ多く有るべけれどもこゝに用無し。美人と畫人との關係ある譚は、王昭君と毛延壽賣餅者の妻にして王宮に強取されたる女と王摩詰との事などあれど、それもこゝには用無し。曲齋の言、徒らに己が心の想ふところを以て古の事の存するところと爲さんとするのみ。曉臺の説もまた捉風摸影の談のみ。齒を痛む人の姿のこゝとを言へるものを思ひ浮めだにせば、此句おのづから解くべし。枕の草子に、十八九ばかりの人の髪いとうるはしくて、たけばかり、すそふさやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色白う、顔あいきやうづき好しと見けるが、齒をいみじく病みまどひて、額髪もしとゞに泣き濡らし、髪の亂れかゝるも知らず、面紅くて、おさへゐたるこそをかしけれ、と清女が筆にかきたるを、畫の如く巧に描きたれば、勁捷に畫にかきてとは句作りせるなり。前句羅綾のたもと絞りたまひし人を、清少納言が仕へし一條天皇の皇后定子と取りたるは、榮花物語の、か

がやく藤壺の巻を見れば、誰しも思ひ得ることなり。定子は關白道隆の女、兄の伊周等の罪を得る有るに及びて、帝の寵は猶ほ深かりけれど、世の用ゐは衰へ、且つ新に攝政道長の女の彰子即ち輝く藤壺の入内するに至りて、勢威大に届し、天皇亦道長を憚りたまひて、御意に任せず、病有るに際して祈禳の師を求むれども、一時の高僧等さへ道長を憚りて肯て來らざりしほどなり。長保二年に、帝と后との相會ひたまふや、后の辭氣悽惋、身をばともかくも思ひ侍らず、唯稚き(后)の生みたまへる敦康親王(御)有様どものうしろめたさに、帝に見えたまへることゞも榮華物語に見え、その後つゆ物も聞しめさで唯夜晝涙に浮きてのみおはしませばとも記せり。此后憂愁の餘に疾を得て終らせたまへるに、御帳の紐に結びつけられたる文有りて、中に悲しき歌ありたり、後拾遺和歌集第十、哀傷の歌の劈頭にあるもの是なり。清少納言は此宮に仕へしにて、後に至りて其昔を慕ふ思をのべて宮の御勢有りしほどの事を所々に書きあらはしたりとなり。前句を定子の宮の御上とは限らねども、およそは然るおもむきに取りて極めて似つかはしき句なり。此句枕の草子の「病」の條を踏へ

て才女の懷舊執筆のところを作れり。感思は前後二句の間におのづからに
織々とあるべし。榮華物語に枕之草子、皇后宮に清少納言、前後の情景映發の
ところを看取すべし。まことに齒を患ふる美人などを典籍の上に求めん
とするが如きは、珍碩をして泉下にけゝん顔さすべきなり。

薄雪たはむすゝき瘦せたり

正 秀

畫工の妙腕を歎賞し、非常の芒も葉をいためしむる風情なり、と興するなり、
と前人は釋せり。奇異なる歎賞の仕方なるかな。陋解といふべし。句の響
の空撓のと、趙括の談兵、利口捷辯にはあれど、まことの戦には敵の主力の有り
どころをも知らぬが如し。此句、たはむはたわむにて、撓むなり。たゞ是れ景
色の句にて、薄雪のたわめたる芒の水氣無く硬ばりて、流石に折れもせねど、瘦
せ枯びたるところをば、まことに能く云了せたり。さて表の容はそれまでに
て、裏には意を含めり。こは又まことに能く貧寒の老女のすさまじく且あは
れなる中に、意地有りげなるところを云了せたり。是の如くに、ずばりと云放

ちても、其中に靈機妙用の潛み居りて、直ちに何事を言へるかの人に感徹する
を、象外影略の文法といひて、呼應錯綜の文法なんどのみを神異に思へる分際
にては、能くせぬことなり。よくよく此句を味はふべし、老乾びて般若面の如
く鼻高く口大きな女の、髪も疎に透きたるが、摩りきれて短くなりながら猶
ほそらさまに立ちたるも有りて、しかもそれが白く寒げに見えつゝ、また全く
白盡もせぬさまの想はるゝにはあらずや。李白が只今惟有鷓鴣飛の一句は
越中懷古の感おのづから言外に在り、眞山民が聞雨寒更盡、開門落葉多の一聯
は落葉の聲の雨の如きさま、象外に見ゆ。歸禽易見巢といへば、落葉古林のさ
まも見え、魚戲新荷動、鳥散餘花落といへば、春末夏初の閑趣解すべく、三山巨鼈
湧、萬里大鵬飛といへば、海天濶空の状想ふべしである。此句は前句に枕之草
子の文を踏へあるをもて、此句中には何の事も無けれど、直ちに清少納言零落
の後、若殿上人數多同車、彼の宅の前を渡るの間、宅の體破損したるを見て、少納
言無下にこそ成りにけれと、車中に云ふを聞き、本より棧敷に立たりけるが、
簾を搔上げ、鬼形の女法師の如き顔をさし出し、駿馬の骨をば買はずやありし

と云ひし古事談第二卷のさま、おのづからにして見ゆ。形象は全く前句に離れ、何處に少納言の事あるにもあらねど、不説々、不聞々、斧聲は白雲の中より來りて樵者の貌おのづから知るべく、花片は碧流の上に泛びて鰈魚の味既に察するに堪へたるがごとく、老いて且貧にして屈せぬ才女の骨柄眼に見ゆるを覺ゆ。瘦せたりの一語、下し得て甚だ佳なり。

藤垣の窓に紙燭を挟みおき

珍 碩

垣はあて字なり。鳥の巢をかく、蜘蛛の巢をかく、こまひをかく、籬をかく、簀をかくなどの類の語なり。庇廂裏、下地窓など、藤蔓をもて竹木を結び絡むことあり。其の絡む方より云へば、やまとがきと云ひ、其の絡む料より云へば藤がきと云ふなり。字に泥みて藤の籬と取りては通じがたし、竹籬の類と思ひて、竹がきならば又趣向かはらむと、次の句に冗言を弄せる前人あり、笑ふべし。わびてをかき庭の景の夜の薄雪、古詩人のいへる三上の一に一章の吟もあるべきところなり。

口上はてぬいにさまの時宜

正 秀

客を送る主、主に謝する客、主客互に慇懃丁寧なるは好けれど、客のねばり口上、少し滑稽に墮ちたる傾あるなり。

たふとげに小判かぞふる革袴

珍 碩

逆附なり。恩借の事叶ひて小判を受取り得、口上果てぬ往にさまの謝辭となり。革袴は元祿の頃に猶ほ士人の着たるなり。宮本無三四、佐々木巖流の爲に革袴の裾五寸ほど切られたる譚など思合すべし。甲子夜話卷二に革袴の事見ゆ。但し當時すでに革袴着るはや、古風質朴の人なりし故に、其人柄を見はさんと特に革袴とは云ひて前句に相應させたるなるべし。

秋入初る肥後の熊本

正 秀

大阪藏屋敷の役人の大金を數ふると前句を見たるなるべし。肥後米日本

第一の上米なり。秋入りそむるは收穫の秋入りそむるを云へる歟、熊本へ秋に當つて人の入りそむるにはあらぬなるべし。句作り巧にして不つゝかなるが如く、不束にして巧なるが如し。されどおのづからにして能く聞ゆれば悪しとは云ふべからず。秋入初るを秋になりたりとのみ解しては附味不明なり。

幾日路も筈で月見る役者舟

珍 碩

これは前句を秋になりて熊本の景氣よきに會はんと大阪役者なんどの舟旅するさまを云へり。

す布子一ツ夜寒也けり

正 秀

す布子は布子のみ着たるなり。一句不如意の哀れなる態、悲しき季節なり。

澤山に兀めくと叱られて

珍 碩

兀めくと叱らるゝ者を、貧乏馬士の老妻なりとなすもあり、夏癩の痕の遺れる年季奉公の小者ならんと思ふもあり。叱られてといふ語を味はふに、老者の兀頭よりも、幼年の渾名ならんこと、似合はし。いづれにしても、何事かの争ひ、又は何事かの過ちしたるため、叱られての後を夜寒に縮み居たるさまをかし。

呼ありけども猫は歸らず

正 秀

老ぼれたる兀猫の餘りに罵り叱られて自ら世に在らん程を知りしにや、今更あはれと呼ありけども歸らずして其姿を見せぬとなり。是れ一解なり。又、兀めくと役立たずの兀めと叱られたる者の、しきりに捜し求め尋ねありけども、猶ほ其猫は歸らずとなり。是も亦一解なり。兩解いづれも通すべし、細論するを要せず。

時鳥御小人町の雨あがり

珍 碩

前句夜や、更けて心づかひありく態なり、時鳥の雨上りに一聲啼ける、おのづから有りもすべき場合ならずや。御小人は武士の卑しきものにて、身分高からず、走使などするもの也。それ等の住める町といへるに大屋敷の嚴めしきあたりにもあらず、又商家の肆を列ねたる賑はしきところにもあらぬさま、いかにも似合はし。

やしほの楓木の芽もえ立つ

正 秀

前句の場處の景色なり。やしほの楓は、紅の八入染の紅葉といふ義よりの名なれど、まことの秋の紅葉にはあらず、單にやしほともいふ楓の屬の庭樹の一種にして、春晩夏初に當りて嫩芽甚だ紅に全く夏に入りては緑になるものなり。雨上にもえたと云へる、其樹の色を如實に畫きて好し。夏季の時鳥に春夏の交のやしほの木の芽もゆるといへる、季の扱ひも無理ならで如實に敘して好し。

散る花に雪駄引ずる音ありて

珍 碩

前句は門の見入の一木二木か、さなくとも矮き菊込籬などならむを、こゝには廣大なる庭園の飛石傳ひに觀賞するさまとしたり。池のあなたの火の如き八しほの楓、築山のこなたの雪の如き落花、平めなる岐れ路の大石に、雪駄ゆたかに引ずりたる、人と景と、おのづからにして長閑に楽しく暖かげに見ゆ。

北野の馬場にもゆる陽炎

正 秀

雪駄は千利休始めてこれを作らしめ、雪の時に露地に入る草履に濕氣の透らぬやうに、裏に牛皮を付けたりと云傳ふ。然れども其實は然らざるが如し、平安朝の頃にたちばといへるものは、およそ後の雪駄に似たるものならん。但し雪駄、せきだ、せちだといふ稱の起れる所以を知らず、又利休が今の雪駄を創製したりといふの據るところを知らず。貝原篤信、寺島良安等の利久創製の説を取れば、世俗のこれを信じたるも久しきこと知るべし。此句は前句

に因みて、豊太閤の北野大茶の湯の催しを附けたりといふもの、舊解の一致するところなり。されど北野大茶の湯は天正十六年の十月なりしこと、北野大茶湯記及び豊鑑等に見えて、花の散り陽炎の燃ゆると、季節餘りに違ひたり、雪駄が茶宗の創意なるより大茶湯を附けしといふも、果して然らばおもしろからぬ趣致といふべし。こはたゞ前句の雪駄引するなどいへるに都びたる風情あれば、その趣をもて洛北の地を點じ出し、散る花といへるに馬場のあしらひを爲し、もゆる陽炎に陽春の麗らかなる景を描きて、太平恬熙の樂しきさまに一卷を結び了りたるなるべし。

(苗代時の巻終)

猿 蓑 抄

猿蓑は元祿四年仲夏凡兆去來の需によりて尾に題せるよしの文章の跋文によりて、同三年あたりより撰の企ありしか否やは知らず、四年辛未を以て凡兆去來の手に成りしこと明らかなり。凡兆去來は京に在り、芭蕉は三年四月江州石山の奥なる幻住菴に入りて居を定め、四年四月は京の嵯峨なる去來が落柿舎に遊びなどせるなれば、此間に芭蕉の心裁手定を得て猿蓑の出づるに至りたること推知すべし。集の體は先づ多く發句を載せたること曠野の如くなれど、末卷に至りて幻住菴の記、および菴に關する詩、俳句を載せたること、いたく他の集と様かはりたり。集の調は華實俱備、奇正雙收、俳諧者流の所謂不易と流行とを兼ねて、既に全く古調談林調を蟬脱し、弄語諛辭の窠臼を出で、通俗の言を以てすと雖も詩歌

の眞精神に於て立つあらんとするの蕉風を渾成せるにちかし。卷一より卷四に至るまで、收むるところの發句、佳なるもの多し、他の集の及ぶ能はざるところなり。連句に至りては、冬の日を力を用ゐること多きに過ぎて煥爛なれども固し、炭俵は興を取ること輕きに傾きて清新なれども淺し、此集のは中正韻雅、しつとりとして好し。篇什多からざるを憾むと雖も、第三第四の品に墮つる者も亦これ無し。世の猿蓑を好むもの多きも宜なりと云ふべし。

鳶の羽も刷ひぬはつしぐれ

去 來

風蕭々として寒林骨あらはなるに初時雨のさつと降りそゞぎて梢にとまり居れる鳶の子然として獨り在るさまを云へる一幅の疎林寒雨の好畫圖なり。たゞ是れ韻致を以て勝る、理致を以て高きの句にはあらず。然るに舊解に、彼方の枝にとまりたる鳶の羽を刷ふを見て、人として容を治めざるは鳥にしかずと觀するさまなり、など云へるは、曲齋の蛇足なり。鳶も羽をと作るべ

きを斯く云へりといへるは涼岱の愚説なり。羽もといへるも文字、諸鳥へかけて云へるなりといふも、雨やどりせる人へかけて云へるなりといふも、皆要無き贅言なり。鳶の平生の姿、鳥の雨風にあへる姿などを知らば、此句のも文字を下せる所以、かいつくろふといへる語を用ゐたる所以もおのづからに曉るべくして、去來の詩眼精警、詩腕靈活なるを悟るべし。鳶は鴟梟と並稱して、梟なんどの如く、羽毛ふくよかに、姿むくつけく、烏鳩なんどの如くに引締りたるさまならぬものなり。又一切の鳥類は雨にも風にも其頭の方をさしむけて、必ず身の羽毛の逆立たぬやうにするもの也。もとといひ、刷ふといへる、極めて面白く、時雨の颯然として初めて至る、寒樹孤鳶、狀景想ふべし。しぐれなるかな、鳶なるかな、時雨なるかな。和漢朗詠集卷下、源爲憲詩、鶴閑翅刷千年雪の刷は拭也塗也、こゝの刷は整也脩也。刷、刷、刷、皆通ずる字にして、刷は和名抄に羽づくろひと訓み、刷は玉篇に鳥毛衣を治むるなりと釋せり。刷ふといふ語を特に用ゐたるとも、文字を特に下したるところを味はふべし。

一ふき風の木葉しづまる

芭蕉

春雨にも秋雨にもあらず、夏の夕立雨にもあらず、ぬ時雨の降りたるさま、一句の中にあらはれて、且起り且休める風、忽ち降り忽ち止める雨、落葉のはら／＼と墜ち、かさこそと走り、旋り舞ひて扱しづまれる状、僅々十四字の上に見ゆ。これを逆附の脇句なりと云ふは、云はでもがななり、打添の附なりといふは宜しかれども、それさへ言や口を出で、機既に差ふものなり。此の木葉しづまれる時、鶯の羽のかいつくろはれしなり、赤冊子の言考ふべし。

股引の朝からぬる、川こえて

凡兆

朝から濡る、といへるに、其人の情を具して、寒雨落葉の景の中に小川をかち渡りする男を點じたり。橋の落ちたる川邊に行路難を歎ずるなど、釋せるは、聊か過ぎたり。凡兆は肚裏に物有る如き句を作らで、さら／＼として氣味新鮮なるを喜び詠する作者なり。

たぬきをおどす篠張の弓

史邦

篠の張弓とすべきを篠張の弓としたるに、聊か曲あるところを看取すべし。挑灯の弓、突上窓の弓、皆弓の名を負ひて、眞の弓にはあらず、こゝのは弓は弓に近けれども、これも弦を張りたる案山子の持弓ごときにはあらず、舊解皆前句の川越ゆる男、狸おどしの篠弓を携へたりと爲せるをもて、其趣は解し難く、其状は笑ふべきを致せり。大の男の篠弓一張持ちて、股引の濡る、川を涉れるさま、狸をおどすとよりは、狐につまゝれたる姿なるべし。篠弓ならば二尺七八寸なるべく、伊勢貞丈も然云へり。さる小さき細弓を如何なるところに如何に置きて狸をおどすべきや。篠ためて雀弓張る男の童、たひ烏帽子のほしげなるかな、といへる西行の戲歌は、夫木抄卷三十二に見えたれど、それは雀射んとする男の童なれば、篠弓も似つかはし、股引男の篠弓持ちて川涉りするが狸をおどさんとするなりとは、餘りに戲畫の如く虚談の如し。甚だしきかな、後の俳諧者流の世の實際にも疎く、詩の眞味にも遠ざかれるや。これは篠

むらの篠の強きを地に生ひたるまゝ、撓め伏せて弓の如くに張り、樹の枝極な
んどもて土に縫ひつけ置き、すこしく之に觸るれば、機發して俄然として觸れ
たるところのものを弾き撃つやうにするものを云へるなり。狸狐兔などの
の類、皆これをもて威し畏れしむべく、其大なるものに至つては、檜櫟などを
弓として野猪をもおどすべく、今の語にぶつばたきと云ひて、山村僻地などに
ては稀ならず爲すことなり。一句は正しく此事にて、特に篠叢は川添などに
に多きものなれば、前句との照映も自然にして宜しく、濡れ股引に狸おどし、感
情景境相應じて如何にもわびしく寂びたる片里のさま見ゆ。

まいら戸に蔦這ひかゝる宵の月

芭蕉

まいら戸はまひら戸なりや、又まゐら戸なりや、不明なり。多く玄關に立つ
る戸なれば、參らう戸なりといふは疑ふべし。框の間の全部を板もて張り、こ
れに一寸内外の幅ある木を繁く横さまに取付けたる戸なり。板を綿板とい
ひ、取付けたる木をまいら子といひ、取付くるには小間がへしにするを常式と

し、或は小間返しよりも間を疎にもす。小間返しとは其取付くる子と、子の間
とを同じにするをいふ。子と框とを黒塗などにするを常とす。士人の家、
醫、庄屋、寺など、玄關正面に用ゐらる。蔦這ひかゝるは、宵の月とあるにより
て蔦の影這ひかゝると看る方よし、實に蔦の這ひかゝれるとすも宜しかれ
ど、さては宵の月いたづらに空に在りて有るかひも無からむ。前句とのかゝ
りは解を須たで明らか也。篠張の弓の長押などに懸けてありたるを見て、其
家のさまを附けたりといへる空然の註、蔦の影を指さして、あの如くなれば狸
が飯盗みに來て叶はずと噂するといへる曲齋の釋も要無きことならむ。零
落の山寺などに見るべしと曉臺の云へるは、山寺と限りて云はざるも却て宜
し。夫木抄卷二十七、人住まで鉦も音せぬ古寺にたぬきのみこそ鼓うちけれ、
寂蓮法師の歌も思合されてをかし。

人にもくれず名物の梨

去來

田舎のまいら戸あるやうなる家又は院の主人など、得て慢氣強く見識ばり、

又はふしぎに物愒みして刻薄なるなどが有るものなり。澁紙袋の月に黒
黒と庭の梨子のなりたるを云へり。徒然草、神無月の頃栗栖野を過ぎての段、
彼方の庭に大きな柑子の樹の枝もたわわになりたるが、廻りを厳しく圍ひ
たりしこそ少しことさめて此木無からましかはと覚えしか、と云へるの趣も
あるべくや。

かきなぐる墨繪をかしく秋暮れて

史 邦

磁盆または高坏などに名物の見事なる梨子あるとして、氣象卑しからぬ
人の世をも物をも物の數ともせざる風なるが、心任せに年や、更けて畫事の
閑戲に今年の秋をも清らに楽しく經なんとする趣を云へり。かきなぐるの
五文字よく働きて其人柄見ゆるが如し、畫家と見んよりは隱士高人と見るべ
く、名物の梨子も此人にあひてはさして珍重もされず、自らも貪らず人にも呉
れず差置かるゝなり。但し名物のおのづからにしてかゝる人の許に現はる
るも亦おもしろき世の態なり。前句名物の一語に着眼着力して此句は成り

たるなるべし。墨畫に秋暮るゝ自然のうつり宜し。

はき心よきめりやすの足袋

凡 兆

前句の人の穿けるなり。めりやすは今も用ゐる語ながら、當時のは今のも
のとは少しく異なりて粗なりしならむ。或はいふ、今のメリンスの足袋なら
むと。確知せず。鉛筆石鹼等と共に毛織毛編も元祿の頃既に用ゐられしな
れど、めりやすの足袋は猶ほ普通のものにはあらで、物好の人の侈りにやあり
けむと覺し。一句に庭前屋後の逍遙のさまありて、前句の秋暮れてと照應せ
り。

何事も無言のうちは靜なり

去 來

めりやすの足袋を穿けるやうなる世を快適にすらりと送れる人の洒脱な
る境界、何事も無言のうちは靜なりと取澄したるなり。囊を括るごとくにす
れば咎無しとある易の文を踏へたるにもあらざるべけれど、纔に口舌を動か

せば是非の蜂起するが常なり、黙の一徳たゞ安靜を得べきなりとなせるところを附けたり。これを坐禪觀法などする人の無言の行を修むると取りて解するは、深入りして却て妙ならず、前句を忘れてのけたりといふべし。帶を忘るゝは帶の適なりとは莊子も云へり、めりやす足袋のはき心よきを覺ゆるやうなることにて、何の禪も天台も眞言もあらんや、修行沙汰の無言にあらぬは分明のことなり。

里見えそめて午の貝吹く

芭蕉

此句こそは前句を無言の行として附けたるなれ。大和大峰入の山伏の行法果て、下山するところにて、貝は修驗道の道具即ち法螺なり。午は午刻なり。法螺は行儀の結散、行者の進退を爲すもの。前句と此句とのかゝり、おのづから知るべし。

ほつれたる去年のねごぎのしたゝるく

凡兆

したゝるくは滴るより出でたる語ながら、轉じては物の萎え潰え汚れて埒無くなり、漸く其の本體を失はんとするを云ふ。單に垢染みたりとはあらず。千載集卷十九、赤染衛門、今日もはや午の貝こそ吹きつなれ未のあゆみ近づきぬらし。前句の午の貝を晝食の時と取りて、旅客の道の小家の縁をかりて、去年の寐蕙のしたゝるきに腰をおろし、晝餉せんとするおもむきを描けり。

芙蓉の花のはらくと散る

史邦

邦俗芙蓉といへば木芙蓉をさして云ひ、又木槿花をも蓮花をもはちすといへど、この芙蓉は木芙蓉にもあらず、木槿のはちすにもあらず、文字通りに蓮花をさせるなり。木芙蓉ならば秋なり、一句にて捨てらるべからず、又ははららと散るものにもあらず。蓮根を得べき料にと侘しき田家の前に小さき蓮田など、得て有るものなり。前句の場の景、兀猫の日に睡り居る也、など、ありもすべきを、芙蓉の花を見出して轉じたる、おもしろし、これを籬に干したる古筵の蓮池へ落ちし、蓮池へ古筵を投捨てし、蓮華賞觀の座に敷ける古筵の

と釋したるは、いづれも解に過ぎて、公事師の強辯に近し。

吸物は先出來されし水前寺

芭蕉

肥後國熊本江津川上三里ほどの水前寺村より出づる川苔を略して水前寺といふ。肥後は川苔を産すること多き國にて、菊池郡菊池川の菊池苔、託摩郡川中島の清水苔、上益城郡大臣川の内大臣苔、皆名あり。就中水前寺苔の名、世に鳴りて響き、滋味ありとはあらねど、人其の清美を稱す。先出來されしは、まあ結構なといふが如し、賞揚の辭なり、先を初として解するは非なり。吸物は今人羹汁の義としてのみ解すれど、三汁七菜若くは九菜の獻立とすれば、最初の汁は味噌汁、次のは椀盛、これは魚鳥蔬菜を取交へて醬油仕立、最も豊美にし、扱最後に出し侷むるが吸物にて、淡泊を旨とし、鹽仕立或は僅に醬油の影を見するほどにし、腥羶も用ゐることはあれど、重くるしからぬやうにして、酒をはずましむるを常式とすること、饌書の類を考へて知るべし。されば吸物出づれば酒はそれより一トしきりして終りとするが宜しき客振にて、こゝに挨

拶ありて、謙の主人振を賞し謝し、満足愉快、歡を盡したることを敍ぶるなり。吸物に水前寺など、もとより相應はしく、前句をこゝに荷花觀賞の雅宴として、遠國の佳下物に、客振主人振共に拙からず清興を催したるさまを只十七字にあらはしたり。

三里あまりの道かゝへける

去來

前句の先出來されしを、いまだ其用意も無からむと客の思ふに早くも吸物こしらへて持出たりと見て、寛々と落つき居られぬさまを附けて三里餘りの道かゝへけると作りたり、といへる猿蓑さがしの解はわろし。先といふ語を早卒と取りたるも失考にて、吸物を第一に出づるものと心得たるも誤れり。勿論饗應の初に出づる味噌汁を味噌吸物とも云はぬにはあらねど、それは小鯛などを實としたるものなれば、天明あたりの黄表紙に、鯛の味噌吸で一盃飲みかけ山、なんといふ常套語もあるなり、水前寺苔の吸物など、初に出づるものと心得たるは非なり。こは、段々の馳走に時移れば、此の御吸物の結構なる

に今一つ頂戴して直に御暇致さんと三里餘りの道を歸るべき客の挨拶するなりと婆心録の解せる方、説き得て好し。

此春も盧同が男居なりにて

史 邦

盧同は唐の人、茶を好みて、茶經の著あり、詩を善くして、韓退之に知らる。其人風流奇僻、青雲を意とせず。昌黎集卷五に盧同に寄する七言古詩長篇あり、同が石洪、溫造、李渤兄弟にも似ずして眞の隱者なるを知るべし。中に句あり、曰く、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒と。この長鬚の奴の、同の爲に韓公の許に往來再度したること、詩に見ゆ。詩は古文眞寶前集にも載せたれば、當時の人の耳目にも疎からざりしなり。こゝは盧同の如き風流の人といふまでの意に用ゐたるにて、眞の盧同が上を言へるにあらざるは論無し。たゞし盧同が男といへるは、長鬚にして頭を裹まざる奴の如き樸實忠誠の男を云へるにて、三里の路を苦にもせざるに、二度往復したる詩中の俳をも少しは寄せたる歟。あらず、然までは入立ちて説くにも及ばじ、たゞ朴野なれども心底は宜し

き僕といふほどに解して足るべし。居なりは變動せざるの義なり。即ち勤めつゞき居りてとなり。前句の客の僕なり、附味解するを須ゐず。

さし木つきたる月の朧夜

凡 兆

前句の男のさしたる木の活着したるなり。曉臺曰く、居なりといへるに着きたるとは響なりと。響句の説も足の如くに説けるは可なり。此卷の弓といへるに宵の月といへるは句、人にもくれずに秋暮れては響をかしくに心よきは響なりなど、一々響句の沙汰にかくるはこちたく厭はし。櫻枝の成不成を月の朧夜に見定むるところ、さし木を念頭に置けるもの、情も眞に有り、景も眞に有りて、下七文字たゞに季節を合せたるならず、おもしろし。

苦ながら花にならぶる手水鉢

芭 蕉

苦ながらは苦のまゝ、にとも、苦あれど、も解し得、前のは正しく、後のは俗なり。こゝは苦のまゝ、又は苦と共にと解すべし。苦あるに過ぎぬ古物なれど

も強ひて之を花として手水鉢を据ると解する人あれども、解に過ぎて宜しからじ。さらば、花とさしたる草の一瓶の如く、花とならぶるとあるべし、花にならぶるとはあるべからず。茶庭のつくばひと此手水鉢を定め決むるも拘はり過ぎたり、つくばひ近くに花、さし木なども釣合はねばなり。たゞ是れ庭せりする人の體なり。前句のさし木を花ながらさしたる山躑躅として、此句を苦ながら置据るたる手水鉢とするは、句をおもしろくせんとして、事情を無理にするもの也、さし木近くに手水鉢など新らしく据ゑられては、さし木は動かされて忽に枯死せん。

ひとり直りし今朝の腹立

去 來

ひとりはひとりでになり。小庭の手入に打紛れて今朝の不機嫌のなほりしといへる舊解よろし。

いち時に二日のものも喰て置

凡 兆

下賤の我儘者には此の如くなるが有る例にて、喜怒常無く、或は少しも食はず、或は大に食ひ、傍より觀れば狂の如く、癡の如し。實は一種の病者なり。此句前句を徹視して如何にも好く附け了せたり。されども、或人は、前句のひとり直りしとあるを慰めくる、者も無き獨身者と取りて、其の生活の悲しく卑しきさまを云へりと解せり。食て置くといへる、置くの語に心を着くれば、或人の解の方宜しきに似たり。前解の如くば、食しまひなど、あるべきなり。凡兆の意いづれに在りや知らず。句は前解の如くにして、食仕舞と爲し、逆附としたる方味鋭し。

雪氣に寒き島の北風

史 邦

一句の仕立柄おもしろし。島の一字に力有りて、三十反あまりの帆も巻揚ぐべき沖乗船の風待得たる趣見るが如く、寒風凜冽たるにも却て喜を爲して、銅顔鐵臂の舟人の今や溟渤に入らんとして、健啖す斗米肉十斤、いざと立たんとするところなり。前句の一轉、こゝに至つて兩句共に輝を生じたり。雪氣

は雪を持てるなり、未だ雪とは定まらざるなり、雪に先だちて走るなど老巧勇
敢の舟人の爲る事にして、雪にあへば舟は快走し難き也。

火ともしに暮るれば登る峯の寺

去 來

島山の高く聳えたる峯に寺ありて、薬師佛など安置せるが、僧は麓に在りて
住し、宵々毎に御燈明奉りに上るなり。雖僧にてもよし、俗人にてもよし、雪げ
に寒き風の裏を躡々然として登る風情、晝の如しとや云はむ。此句また好し。
但し言外に渡海廻船の目當となるに定まりたる常燈のおもむきは現れたり。
こゝに前句の裏に見えたる舟人を出さざりしは甚だ妙なり。

ほとゝぎす皆啼仕舞たり

芭 蕉

暮るれば登る峯の寺、宵々ごとに往くか還るかの路の上に杜鵑の聲を聴く
ことありしに、今は老樹陰森として嫩葉も茂り蔽ふやうなり、ほとゝぎすも皆
啼終ひたるや、其聲も聞えず、との句にして、言外には何事かの心願などありて、

夜々に御佛を頼み奉れる者の、節物の變化に心づきて、此心の未だ酬はれざる
に感愴するところを少し含めたり。けりとせずして、たりとなせるところ、端
的にして妙言ふべからず。たりをけりと改めたしといへる者の如きは、詩眼
腫焉たりといふべし。

瘦骨のまた起直る力無き

史 邦

一句も附味も解を須ゐで明らかなり。句作りも好く、句情も現れたり。

隣をかりて車引こむ

凡 兆

舊解區々なり。兼好法師伊賀國見山の麓なる田井の莊にて病みし時、帝
より三十石の米を賜はりしことあり、其米車を隣家をかりて引込むと作意し
たるなり、といへる解は甚だ拙し。他郷に病みて、ゐざり車にて歸り、舊の隣家
の助を假れるなりといへるも、あまりなる解なり。家居引こみたる足輕町に
て、車もて搬び來れる扶持米を一人者の病中なれば隣家へ頼むなりといへる

も、一應は聞えたれど、情景不妙なり。こは去來が浪化に與へたる書に、隣をか
りては夕がほ、とあるに據りて、源氏物語夕顔の卷を面影にして作意したりと
解すべし。去來の書は、寛政三年に至りて、關更門人岸泚の手より世に出づ。
信すべきや否や疑はしきものにして、越人の猫の戀の句の評など、去來抄の記
せるところと杆格せるあり。されど岸泚強ひて偽を構ふべくもあらねば強
ひて疑を懸くべくもあらず。去來既に此卷の連衆たれば、句は凡兆の作なり
と雖も、去來の言をもどかには、隱當ならじ。前句、瘦骨のは、正しく大貳の乳母
の痛くわづらひたるに當てなば當つべければ、隣をかりて車引込みしことは
本文には無けれども、乳母を訪ひたまへる源氏の車の門鎖されたるまゝ、隣家
即ち夕顔の垣根に咲けるあたりなどに立ちおはしましたることありて、や
がて惟光の門を開けたるに、引入れて下り給へる時のありさまを、少し桂馬筋
に隣をかりてとは句作りしたるなるべし。去來の書に、當流に面影をもつて
句を付申候事御座候、是は古人のしたる事を其通りに句に仕候へば故事に候、
其故事とはちがひ候、たとへば書にも文にもかつてなき事も其人の風情如此

なるべき事と思寄せ可仕候、とある如く、故事本文のおもむきを打掠めて作
るが面影をもて句を附くるといふ事なれば、此句夕顔の卷の面影をもて作り
たる事疑ふべからず。これを、源氏の車の隣へ入りしにもあらず、乳母の家の
門の開かざりしにもあらず、事柄違へり、と云ひて曲齋の難せしは、面影の附方
をも曉らぬものにして、詩は故事の註釋にもあらず、まして俳諧は窮屈ならぬ
を旨とするといふことをも忘れたるの言にして、取るに足らずといふべし。
或は曰ふ、隣をかりては隣さかりての誤なり、さかりては離れてなり、源氏夕顔
の花を取らせ、白き扇のいたう薫したるを得などして、隣家の前に在りたるが、
惟光來りて門を開きたれば、便ち隣の家をあたりを遠のきて入りしを云へり
と。さかりてとすれば難無く通するやうなれど、さかりての語や、耳遠くし
て似つかはしからず覺ゆ。

うき人を枳殻籬よりくゞらせん

芭蕉

前句に通ひ車あり、此句に枳殻籬あり。古今著聞集卷九に見えたる八幡太

郎猪隈の法師の妻に密會する段の事、車といひ、藤といひ、其事甚だ相應するが如し。されどもそれに本づきての句にはあらず、其俳として解かんは宜しからじ。憂き人は、我に物思さする人にて即ち戀人なり。一句は其人の打絶えて久しく訪來ざるに恨み哀みて、枳殻の籬の刺鋭く邪を防ぎ、門の扉堅く鎖して自ら守り居り、假令其人來るとも、たやすくは門も開けじ、枳殻籬より潛らせむ、我が憂き辛さの痛き思を身にも知れかしと、勿論實に然はすべきにもあらねど、女心の遣瀬無きあまり恨み募れる情なり。前句にほの見えたる夕顔の君にかゝる意境事情などありしにはあらず。前句に我家の門を開けずして隣をかりて男の忍車を引入れたる風情あるより、戀に心の狭められたる女の幽恨嬌嗔を懐けるさまを如是は作れるなり。一句の仕立に心を碎きて、何かの古き草紙物語などにかゝる事有りもしたらむ如くに、まことの世に實存する人情を詠じたるなり。これを鎗の權三の曲の如き事實として、解するは當らず。極論すれば猪隈法師の家、堀ほりて其端に藤などを植ゑたりけりとあるに着想の種子を得たるや否やは知らねど、作者の腔子裏の消息を語るも

要無きことなり。

今や別の刀さし出す

去 來

前句は容易には内へ入れじとなるを、こゝには容易には外へ出さじとする意に取りて、歸らんとならば枳殻籬より潛り出たまはゞ兎に角、など、引留めたれど、さてしもあるべからざれば、是非なく別の刀さし出すなり。遊君などの風情、古き時代の態の戀なり。今やのやは、その如し。舊解多くは源平盛衰記を引きたれど、盛衰記にはあらず、曾我物語卷五、五郎をんなに情をかけし事の條、梶原源太、化粧坂の遊君が許に宿りて、曉かへるとて如何したりけむ、脇の刀を忘れて出でけるを女の許より刀をつかはしけるとて、いそぐとてさすが刀を忘るゝはおこしものや人の見るらむ、景季馬に乗りながら、弓手の笠をいまだ踏みもなほさず返歌をぞしたりける、かたみとておきてこしもの其儘にかへすのみこそさすがなりけれ。此俳なりと云へり。源太が事にはあらず、ざれど、鎌倉室町時代の俳はありといふべし。

せはしげに櫛で頭をかきちらし

凡 兆

152

一句の仕立柄卑しく俗にして、其情に善く協へり。海道又は山道の旅泊のおじやれ飯盛などの態、見るが如し。これを源平盛衰記、木曾義仲の基房公の女に別を惜む面影なりなどと、解するは、句ざまを味はふことを知らぬといふものなり。櫛で頭をかきちらしながら刀さし出すは一夜泊りの客に對する蓮葉女ならで抑々何者ならんや。前句の古き香のするを此句にて元祿の新しみある目前の状景にしたる凡兆の手づまの利きたるを賞すべし。

おもひ切たる死ぐるひ見よ

史 邦

一句は佳なれども前句とのなじみ足らずして、與奪も明らかならず、自他も覺つかなければ、解釋おのづから區々なるを致せり。勇士死を決せるの態として解するあり、物狂ほしき女のさまと解するあり。勇士とすれば前句似合はしからぬ句ざまなり。狂はしき女とすれば此句の句ぶりは男めきたり。

憂き人より此句まで四句すべて女の上なれども害無しといへる評も、人未だ糺彈せずして先自ら分疏するものなり。畢竟一句の仕立にのみ苦心して、枝折の工夫未だ到らざるより是の如きを致せるなり。されども作者の意を付るに思亂れたる女の終に思決めたるところを附けたるにて、これを勇士決死のさまと見たるは後句の人の手柄なりしなるべし。

青天に有明月の朝ぼらけ

去 來

朝がけの戦に勇氣凜然たる一手の一快戦して呉れんと打つて出でたるなり。附味もよし、句の仕立もよし、颯爽たる意氣言外に見えて、たゞ是れ景色を敘したるながら、人をして慷慨淋漓たらしむ。

湖水の秋の比良のはつ霜

芭 蕉

青天の初霜、大湖の朝ぼらけ、風冷ゆる有明月、比良の高根の眉を壓する、是れ一幅の名畫、爽涼清肅、語を下すを要せざるものなり。

153

柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ

史 邦

秋蕎麥をぬすまれしにて、秋の句なるは論なし、柴の戸やといへるは雅人の
閑居をきかせたるなり。古今著聞集卷十二、澄惠僧都の條、此僧都の坊の隣な
りける家の畠に蕎麥を植ゑて侍りけるを夜盗人みな引きて取りたりけるを
聞きてよめる、盗人は長袴をや着たるらんそばをとりてぞはしりさりぬる。
此の故事を用ゐたりや。場處と季節とのみの取合せ、手柄も無き句なれど、卷
も末なれば尤むべきにもあらず。

ぬの子着習ふ風の夕ぐれ

凡 兆

ぬの子は綿入の綿衣なり。一句も付け意も解をまたで明らかかり。冬季
の句なり、前句を暮秋としたり。

押合て寝ては又たつかり枕

芭 蕉

卑しき人々群れたる宜しからぬ旅泊の態なり。押合ひて寝るといへるに、
蒲團も着ざる姿見えて、布子着習ふ風の夕のわびしさ知るべし。

たゝらの雲のまた赤き空

去 來

たゝらを踏鞴なりとして、鑄物師の夙起して鐵を熔く洪爐の火氣の雪なり、
といへるに舊解一致せり。踏鞴の風とは云ふべし、雲とは云ふべからず。奈
良の大佛を鑄るが如きことは度々有るべからず、たゝらの雲といふ語用ゐら
るべしとするも、火氣の天に映るほどの事、如何で世の常に有るべきならんや。
また鑄物師工場の砲兵工廠の如きが有りとするも、旅人に何の關係か有らん。
さる附句ならんには芭蕉も呆れて、許して可とせんや。笑ふべし解の陋なる
や。幽山が散る花にたゝらうらめし暮の聲、といへる句のたゝらは踏鞴にし
て、鐘と悟るべけれども、踏鞴の雲とのみ云ひて抑々何と悟るべきや。又信州
多々良山の雲なり、句餞別に、信濃路やたゝらの峽の春芽えて、といふ附句あり、
山の雲なること知るべし、とする説あり。たゝらの峽には別に説あり、今之を

論せず。多々良山は聞えたる山にもあらず、人も知らぬ勝なる僻地の山を取
出して、富士の雲淺間の雲と云はんが如くに打任せて不つゝかなる用ゐさま
を去來の敢てすべきや如何。去來これを敢てするとも前句の主たる芭蕉の
之を默許すべきや如何。猜しても知るべきこと也。よく前句を味はふべし、
押合て寢ては又立つ假枕とある也。寢ては又立つは、寢たり立ちたりする也、
寢て、覺めて、扱立出づるといふにはあらざる也。特に押合てとあり假枕とあ
るに其狀を思ふべし、是れ多勢の人の何事か期待するありて、心ゆたかに蒲團
に睡りも得せず、うとくとして又起ち、落つき兼ぬるさまなりと曉るべし。
即ち渡海の廻船などに乗らんとして、天候良からず船の出ざるに、今や出づる
と、人々の船宿に待ち苦めるさまなり。海路川路にかゝはらず、船場にはかゝ
る情狀甚だ多きものなるは、旅して知るべし。九州より中國に渡るには、文字
が關よりするを最も近しとすれども、博多より馬關に至るの海路も亦人の便
とするところにして、博多が殷賑の津、咽喉の地なりしことは古より然り。多
々良濱は香椎名島あたりの濱の總稱にして、蒙古襲來の時にも、足利菊地の争

にも、毛利大友の取合にも、知られたるところなり、川にも多々良の名を負ひ、村
にも多々良の名を負へるがありて、香椎、志加の島、箱崎など、共に博多近くの
名高き地にして、歌名所にこそはあらざれ、誰も知りたるところ、多々良の博多
に於けるは、たとへば品川の江戸に於けるが如きほどのことなり。さて博多
多々良の沖へ出づれば、則ち玄海灘なるが、古の渡海の天候に左右せらるゝは
今にも増したることにて、少しにても日和宜しからざれば、出船を躊躇するこ
と勿論のことたり。およそ曉の空の色、日和宜しき時は淡青く淀みて、やがて
ほのく、明くるなるが、之に反して赤み又は黒める折などは、日和宜しからず、
特に赤みを帯びたるは、油斷なり難きを常とす。前句、押合て臥て又起つを船
待つ假の宿の風情と取りて、此句多々良の雲のまだ赤みの失せずして、あゝあ
あ、と出づべき船の猶出かぬるを人々の愁ひつぶやく趣を作りたるなるべし。
去來は京に住したれども、肥前の人なり、想ふに博多の津に、多々良の雲の赤い
中は船は出ませぬなど云はれて、わびしき宿に、其方の空を眺めしことも有り
けむより、此句は成りしならんと面白し。

一構鞦つくる窓の花

凡 兆

しりがいは面がい胸がいと共に馬を役するの要具にして、鞍より尾に繋ぐものなり。一句は前句の場の延なり。鞦等を作るは江州守山世に其名聞えたれど、こゝは守山をいへるにはあらず。博多は九州に聞えたる殷富繁華の地なれば、町に馬具商ふ家も有るべく、随つて町はづれに皮革の具を製する家もあるべし。一構と云ひ、窓の花と云へるに、少し曲ありて其景趣見ゆ。博多下土居町に古より大なる駄荷馬具屋ありて明治初年に及びて猶甚だ盛なりしなり。必ずしも其家の職人の家といふにはあらねど、人の耳目に立つほどの店も有りしほどなれば、一句も唐突ならず、凡兆は加賀の人なれど、去來によりて此の何となく味ある句を構へ得たりと覺し。

枇杷の古葉に木の芽もえたつ

史 邦

打添ひたる附句、やすらかにして味よし。

(初時雨の巻終)

市中は物のにほひや夏の月

凡 兆

市中は物の句のいきれて暑く煩はしげなり、天にはおほどかに清々しく夏の月の美しきとなり。かゝる句は解すれば即ち錯過す、たゞ味はひて會すべし。

あつしくと門々の聲

芭 蕉

門々の聲、これ市中なり、あつしくと是れ物のにほひ也。打添の脇句なり。

二番草取りも果さず穂に出て

去 來

稻田の草を除くに、最初にするを一番草、それより二番草、三番草と云ひ、四番草、五番草にも及ぶなるに、二番草を取るや取らずや穂の出たるとは、陽氣満足りて豊稔疑無きなり。前句は軒並びの門々なるを、此處には茅屋相望む門々にしたり。暑氣の用なることは論無し。

灰打たゝくうるめ一枚

凡 兆

うるめは潤目鱒の略なり。目大にして赤く潤めるより名を得たり。干物にしたるを火に打くべて焼き、灰打たゝきたるは、草取る頃の農夫の風情なり。

此筋は銀も見知らず不自由さよ

芭 蕉

筋とは條なり、此道筋と云はんが如し。銀も見知らずは、寒村僻地のたゞ錢を知りて銀を知らざる也。網もても焼かざる干魚を出せる山國の開けぬさま、不自由なるを知るべし。

たゞどひやうしに長き脇指

去 來

どひやうしは拍子に合はぬ、即ち度はづれといふことなり。どひやうしなことも云ふは、どひやうしな也。訛りてどひやうしもないと云ふに至つて、終

に解し難きに及べり。本は鈍拍子にもあるべき歟。此句の用ゐざま猶未だ其本を失はず。一句は邊土の者の頑陋にして法外に長き脇指をさし居れるとなり。前句との關はり自然分明なり。これを錫の胴金卷きたる脇指を銀も知らねば銀の胴金ぞと思ひて佩び居るなりと釋せるは解に過ぎて却て味無し。

草むらに蛙こはがる夕まぐれ

凡 兆

長脇指して蛙を怖るゝは小僕の借脇指と前句を見てなり、と舊解云へり。又長脇指したる男の實に蛙を怖るゝにて、外嚴しく内弱き世の中の風情のをかしみを諷せる滑稽なり、と一説云へり。いづれにても宜し、好き句といふにもあらず。

露の芽とりに行燈ゆりけす

芭 蕉

行燈は路次行燈と後に稱ふるものと心得べし。一句も附味も解せずして

明らかなり。女の風情見ゆ。

道心のおこりは花のつぼむ時

去 來

加藤重氏盃中に花の苔の落ちたるを見て發心したる佛といふ舊解は用ゐ難し。たゞ讀んで字の如く解すべし。一句立も附ごゝろも然まで妙無し。落花に發心すとせず、花の苔む時にとせるのみ。

能登の七尾の冬は住憂き

凡 兆

七尾は半島の北海に臨める地なれば、特に住憂き處といふにもあらねど、かく作れり。意に妙は無けれど調に人を惹付くるところあり。道心者の昔語して今を憂しとする也。加茂の社はよき社也などいふ句と同じ行方の句なり。但し撰集抄卷二、見佛上人事の條に、能登國いなやつ郡の荒磯の洞に、松島の見佛上人、月の上十日は住給へり。西行これに逢ひて、所さまさこそ住みよしとおぼすらんと申せば、上人少し笑みて、難波瀉むら立松も見えぬ浦をこ

こ住吉と誰かおもはむと云ふ。西行、松が根の岸うつ浪にあらはれてこゝ住吉と思ふばかりぞと答ふ。右問答のすみよしと云へるに因みて、すみうきと特に作れるにや。同條に、見佛、上十日は何も食ひはべらすとあり。次の句、魚の骨しはぶると作れるも、右の古談を打翻したるおもむき無きにあらず。取舍は人々の心々なるべし。

魚の骨しはぶるまでの老を見て

芭 蕉

しはぶるはすはぶるの轉、吸ひ舐るの義にて、今のしやぶるなり。別にしはぶくの義あれども、此處のはそれにあらず。一句齒も無くなりたるさまの醜く老いたるをあらはして、前句の北國寒地を住憂がるに附けたり。七尾は海邊なり、魚の骨しはぶる、おもしろし。

待ち人入りし小御門の鑑

去 來

源氏物語末摘花の卷に、源氏末摘花の君を訪ひたまひての後朝に雪の積り

たる中を出でたまふ段。御車出づべき門は未だ開けざりければ、鍵の預り人尋ね出たれば、翁のいとみじきぞ出できたる。とある其翁を前句の魚の骨しはぶるまでの老人として此句あり。女とも孫とも分かぬ女の見苦しきが翁を助けたれど猶引開けかねたれば源氏の供人共力を假して開く。源氏ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらす朝の袖かな、幼きものは形蔽れず。と老者は體温まる無しといへる句を残して白樂天秦中吟の詩を誦して出でたる時の俳なり。たゞし本文は門を出づる折の事なるを、こゝには入る折の事として、末摘花の君の方なる女房など姫君の爲に源氏の來まさむことを待望みたるは勿論なれば待人入りしとは作りて、翁の門の鑑さしたる前夜の風情にせり。後朝の門前夜の門おなじ門なること論無ければ、わざと前夜にして、故事の死用を避け、俳諧の活境を現じたるは、もとより去來の腕のはたらき也。末摘花の君は故常陸宮の女なり、此句につきて去來の浪化に與へし文、何のあやまりあらむ。曲齋却て誤つて人を攻めたり。笑ふべし。

立かゝり屏風を倒す女子供

凡 兆

前句の待人入りしとあるを主として、こゝには其家の女子共の其人を覗ひ見んとさゞめきひしめきて屏風を倒すと、世間俗態にして附けたり。もはや末摘花の卷の俳にはあらず。これを源氏のわかきものは形かくれず、と打誦したまへるを和らげて如是作りたりといふは大なる誤なり。源氏の誦したる句は、幼者形不蔽、老者體無温といふ一聯の半にして、本來是れ雪の寒きを云へるを、彼の老翁のかじけかゞめるを見たまへるにつけて誦したるのみなり、此句と何のか、はりあらんや。若し強ひて末摘花の卷の俳として釋せんとならば、二間の際なる障子を鎖して褥うち置き引つくるひたる段の本文に、若き人二三人あるは世に愛でられたまふ御有様をゆかしきものに思ひ聞えて心懸想しあへり、とあるを引きて、若き女子共の源氏を見んとて障子即ち衝立屏風を倒すと作意せりといふべし、幼者形不蔽の句を引かんはいと似合はしからず。舊解には猶次の句の、湯殿は竹の簀子わびしきとあるをまで、末摘花

の君はいと貧しき御住居にておはせば簀子わびしきとくつろげたまへりと云へるなるが、飽まで物語の俤とせんとならば、これも本文に、其の荒れたる簀子に佇まゝほしきなりとある源氏の言葉、簀子などは便無う侍りなむ、推立ちて淡々しき御舉動などはよも、とある命婦の言葉などを引くべし。されど舊解の、魚の骨以下四句皆物語の俤とする説は飽りにこちたく面白からず、立かかりの句、湯殿の句などは、凡兆芭蕉の手のきゝたるまゝ、源氏末摘花の残香餘氣は存するにせよ、たゞ是れ世情俗態の句として解くべし、一々物語取りの句として釋かざるべからざるの故無し。何丸が四句皆其俤なりといふの説は、言の據りどころを撰むことも拙く、意の立つところを明かすことも力無し。

湯殿は竹の簀子わびしき

芭蕉

簀子は本は竹を列べ編みたるものをいふ、こゝのは正しくそれなり、竹の簀子とことわるは、本意より轉じて板を目すかしに列べて作りたるをも簀子といへるより、如是語も出來れるにて、末摘花の卷の簀子は正しく其の板の簀子

縁なり。前句の屏風を見切り屏風として、こゝに此句あり。

茴香の實を吹落す夕嵐

去來

茴香二種あり。八角茴香は如何なる樹なるを知らず。懷香ともいふ茴香は丈高き草立のもの、其花黃、其實麥の癭せたるものゝ如しといへり。こゝのは草茴香なり。秋に當りて小子風に飛んで亂る。湯殿の外に其草有りたるなるべし。八月珠といふ異名もあるものなれば、其狀想ふべし。但し田舎醫師なんどの後園のおもむきにや。

僧や、寒く寺にかへるか

凡兆

や、寒き秋の夕嵐に袖長の僧衣ひらくと尾花かるかやの野末の路など行くさまなり。寺へ歸るかとおあるべきを、寺に歸るかとするは、詩文訓讀の習を用ゐたるにて、朗詠集上卷、蒼苔路滑僧歸寺、紅葉聲乾鹿在林、雲林寺に宿せる温庭筠の詩の句をば誰も知りたればかくはしたるなり。

猿引の猿と世を経る秋の月

芭蕉

僧は寺に歸り猿曳は猿と世を過ぐす。兩者の行合ひたる、何ともおもしろし。猿の無心にして人の背上にある、ことにおもしろからずや。一句の仕立柄にて、おのづからに幽なる感慨の潜めるやう聞ゆるところ、説破すれば、即ち差ふ。味はふべし、説くべからず。味はふべきなり。蕉翁の月の猿飛卿の鹿の鹿よりはおもしろし。

年に一斗の地子はかるなり

去來

地子は田租といふが如し。初は地を假りて田作る者の納めしを地子といひしなるが、世衰へては錢を以て穀に代へ、田つくらぬ町にても村にても地の廣狹によりて之を納めしめ、それを地子錢と稱するに至れり。こゝは猿引の如き果敢なき世渡りする者も、年に一斗の些少ながらの地子を測り定むる世なりとなり。前句の世を経るの一語より此句生れたり。

五六本生木漬けたる瀧

凡兆

五六本の生木を漬け置ける小さき水たまりとなり。寫實の句、おのづから景趣分明解を要せず。材木商の圍ひ場にはあらじ、山里の農間かせぎに櫛櫛など漬け置ける小さき瀧にて、これにも地子のかゝる世なりとなり。

足袋踏みよごす黒ぼこの道

芭蕉

これも理屈の煩はしきには墜ちぬ寫實の句なり。黒ぼこは黒き野土にて、江戸にては黒ぼくといふ、壚なり。黒ぼこの地、やゝもすれば雨上りなど淺き水たまりを生ず、土細かに弱くして、水に腫み膨るればなり。これの道悪しきを濟はんとて生粗朶などを横たへ置くこと、村里に時に見る景にして、前句を其儘一轉して、其の漬かりたる木の上を歩きたる男の足袋をよごしたる體を云へる、まことにおもしろし。黒ぼここと云ひ、道といひたる、眼到り意到り手到りたる鮮やかさ流石なり。

追立て早き御馬の刀持

去 來

刀持は殿に従ひて其刀を持てる者、御馬は殿の乗馬にて殿の其馬上にあることも明らかなるが、一句拙く碎けて、後の床屋俳諧に似たり。前句へのかゝりも妙無きにちかし。

でつ稚が荷ふ水こぼしたり

凡 兆

此句初は糞こぼしたりとしたりしを、芭蕉の教をきゝて水としたりと去來抄に見えたり。駛り馬にあひて水こぼしたるは聞えたれど、興も味も乏しく、前句と同じく床屋俳諧の祖となれるものなり。

戸障子もむしろかこひの賣屋敷

芭 蕉

佳き水の井ある大屋敷の購人無くて久しきなり。

天上まもりいつか色つく

去 來

神佛の守護札、門に貼るを門守りといひ、天井に貼り又は挿むを天井守りといふ。蕃椒は天井より吊下げて乾し貯へ置くを常とするものにて、玉蜀黍、葉煙草などの如くに多くもせぬものゆる俗の謔稱に天井守りといひ、訛りては天井まふりともいふ。此句秋の季の什にして、蕃椒の紅に色づきて賣れぬ屋敷に遣り居たるを云へること論無けれども、天井守りといへる語を用ゐたるは前句の戸障子等に因みたるならん、いつか色づくと云へるもをかす。

こそくと草鞋を作る月夜さし

凡 兆

月夜ざしは月夜といふがごとし、別義なし。小前の農夫、小屋敷の仲間などの態なり。

蚤をふるひに起し初秋

芭 蕉

刀持と丁稚との如し、草鞋作りと蚤ふるひ相對へり。これを對ひづけといふ。又蚤をふるひし人、草鞋作れる人を月夜ざしに見たるなる故、うしろ附ともいふ也。

其儘にころび落たる升落し

去 來

升落しは柵をもて鼠を取るなり、其儘に轉び落ちたる、輕き滑稽なり。

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

凡 兆

半櫃の半はあて字にて、割蓋なる故に半といふにはあらず、割蓋ならぬもあるべし、今あまり用ゐぬ語なり。半ははんだい、はんぎり、はんぼうのはんにや。飯櫃又は米櫃をいふ。はんぼうははん櫃の音の轉にもあるべし。但し半櫃の語の果して飯櫃なりや否や未だ確證を得ず。升落しの落ちたる爲に蓋のゆがみて鼠の米食荒し、さまざまなりと云へる解は惡し。然までに解かずとも、半櫃も反りゆがみて蓋のあはぬ佗しき住居のさまざまなりとすべし。

草庵に暫く居ては打やぶり

芭 蕉

心の物に執しとゞまらぬ道心者のさまなり。打やぶりは、引寄せて結べば草の庵にてほどけば本の野原なりけり、こゝを又われ住憂くて浮かれ出でば松はひとりにならんとすらん、といふほどのことなり。

命嬉しき撰集の沙汰

去 來

去來抄に曰く、初は、和歌の奥義を知らず西行と附けたり、先師曰く、前を西行能因などの境界と見たるはよし、されど直に西行と附けむは手筒ならん、たゞ面影にて附くべしとて、かく直したまひぬ、とあり。去來の原句の幼き、芭蕉の加筆の味ある、相距る三十里のみならず。又これを惡本の去來抄に、初は、和歌の奥義は知らず候と附けたり、に作る。知らず候にては意味も何も無く、芭蕉の語も通せず、所謂俳諧師者流は去來抄をさへ讀み得ぬことをあらはしたり、悲むべし。而も亦知らず候につきて論義を逞しくす、愈々悲むべし。撰集は

勅撰の和歌集なり。前句の道心者、浮世に何の心惹かゝることも無きが、和歌をのみ好めるに、撰集の沙汰ありと聞きてわが歌も一首二首は入るべしや、生命ながらへし嬉しさよと云へるさまなり。西行寂然能因頓阿兼好なんどの俳なること、去來抄の説けるが如し。長秋詠藻卷下、西行法師高野に籠り居て侍りしが撰集のやうなるものすなりと聞きて、歌かき集めたるもの送りて、包紙に書きたりし、西行法師、花ならぬ言の葉なれとおのづから色もやあると君拾はなむ、返し俊成、世をすて、入にし道の言の葉のあはれも深き色は見えける。山家和歌集下にも見えたる此贈答は俊成卿千載集を撰まれし折の事にやありけむ。こゝらあたりの事を踏へて、それとは定めで作りたるなり、其事と拘はり泥みて作りたるにはあらず。西行吾妻の庵を棄て、上京せる時の俳なりといふは非なり、暫く居ては打破りの句勢を味はふべし、度々の事なり、たゞ一度の事を云へるにはあらぬなり。

さまざまに品かはりたる戀をして

凡 兆

前句を世に老いたる歌人と取りて此句あり。戀に歌、歌人に戀、前句と此句とのかゝり、何の解し難きあらんや。強ひて某の人、某の女の俳といふを要せず、詞の如くに其儘解くべし。品といふ語は源氏物語、木卷品定の段の品のごとし。

浮世の果は皆小町なり

芭 蕉

小町は玉造小町壯衰書を引くまでもなく世人の知るところにて、美女の轉變盛衰したるもの、皆小町なりは、皆小町の如きものなりと也。其角の雑談集に、此句の寂びやう、作の外をはなれて、日々の變にかけ、時の間の人情にうつりて、しかも翁の衰病につかはれし、境界にかなへる所、誠におろそかならずと感じたり。此卷草庵以下四句、金盤に眞珠を轉ばすが如く、個々光彩ありて、青光黄光、紅光、白光、燦然、爛然、煥然、煌然、各々相輝映、照徹し、晶瑩、明朗の美、人を撲つものありて、刀持てる男の俗態、水荷へる丁稚の卑態を雲外に遣れ去りたり。

何故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ

去 來

176

粥の振舞を老女などの受けたる所なり。強弩の末こゝに至つて魯縞を穿たざれども、卷も末なれば是非なし。

御留守となれば廣き板敷

凡 兆

人少く家廣きなり、板敷と點出せる流石によし。役向にて出でたるか、病氣療養の爲に出たるかは知らず、大家の板敷の冷りとして廣きさま、凡兆が寫實の手は利きたり。

手のひらに虱這はする花の蔭

芭 蕉

主去つて事無く、錢少くして閑多し。老人なりや否やは知らず、爲すこと無さの酒も飲まずして、蝨を掌上に這はせ視居たるなり。這はするの一語に限り無き滑稽有りて、長閑なるさま眼前に在り。花見蝨といふ俗諺ありて、蝨は

北に向ひ行くものなりなど云へば、下司の戯れに這はせたるにや。元祿博物學は今の我等のよく窺はぬところなり。呵々。古今夷曲集卷五、一圃、花見虱うつりにけりないたづらに我身世にない古き小袖に。花見蝨の語徴すべし。

霞うごかぬ晝の眠たさ

去 來

蝨もあまり動かぬにや、霞は更に動かす、日永くして暖く、人眠らんと欲するなり。常例のゆきかたの句ながら好し。

(夏の月の卷終)

灰汁桶の雫やみけりきりくす

凡 兆

灰汁桶は水をもて灰を漬し、其汁を得べくする桶なり。灰汁は布帛を練るべく、藍をして色を發せしむべく、物の汚染を去るべく、其用甚だ多ければ、人家の灰を買ひありく商買もあり、灰汁を滴瀝せしむべき装置もあり、特に洗張染練を業とする所謂紺屋に取りては梅酢にもまさりて大切なるものとす。普通の家にも昔時は石鹼といふもの無ければ、小桶に水を湛へて灰を投じ置き、時々其の上清を汲みて用ゐしなり。こゝに云へる灰汁桶は紺屋とは限るべくは無けれど、灰汁を瀝らすべきやうしたる桶にて、其下口より滴る雫のほとりくすと音し居たるが夜靜かにして終に止みて、これに代りてきりくすの鳴けるが聞え出したるとなり。このきりくすは今のこほろぎなり。一句たゞ寫實なれど、灰汁桶の雫ときりくすの聲とを入代らせたるところに手づまの利きありて、又けりきりくすといへるところ、聲韻錯綜、調を以て人を魅するものあり。我邦の歌には脚韻を整ふることなきに幾けれど、冠音を

整ふることはあり、詩經の麟之趾の如くに芭蕉のうたがふな潮の花も浦の春の如きは冠音を整へたり。又錯綜して調を爲すことは最も多き例にして、八雲立の神詠より、古き祝詞、後の俗曲に至るまで、皆これによりて辭を文どり感をいざなふ。俗曲蜘蛛の拍子舞の如きは乖巧なるもの、例なり。凡兆は乖兒なり、其句多くは自然の巧模様の一片を拾取し來つて、而して鋪陳の手腕いと鮮やかに、且又此句の如き暗に宮商錯綜の妙技を運らす。又是れ得易からざるの才なり。

油かすりて宵寢する秋

芭 蕉

油は燈油なり。かすりては漸く無くなりてなり。利を得る狡猾の事するをも、かする、かすりを取るなど、いふ。それはやすりかすりなど云ひて、錢の裏又は縁を摩るより云出でたる事にて、今も支那人は銀貨の耳を摩ることあるなり。仲介人などの賣買兩者に少しの損耗を與へ、おのれ少しの利を間に取るをも、かすりを取るといひ、轉じては狡猾に物を吾手に残すをもかする

といふ。此句のかすりてを其意に解して、秋の長き夜に油いたづらに費さんも無益しと、油をかすり燈火を消えしめて宵寝したりと釋く人あり。東京の人などには此解正に當れるやうに思はれ勝なるなり。又油漸く無くなりてならば、油かすれてとあるべく、墨がかすれて、などの如くに、「は」れとあるべく思はれ勝なるなり。されど此釋は、文化文政頃の、ひすこき俳諧の料簡に適したることにて、油の價高しとて餘りに卑しき情なり。脇句の氣品無し。且又宵寝したれば宵寝したるにて宜し、其宵寝したるは油をかする爲なりと説明したるは、芭蕉の句とも思はれぬ句なり。こゝに於て油を油壺にこすり入れて寝しなりなど、いふ釋も出づるに及べり。油を悋まば燈心を引入るゝのみにて、燈は滅え、事は足るべし、何のおろかしくも油を油壺にかすり入るゝ要あらむや。畢竟此句は油をかすりてと、を文字を加へて解すると、油がかすれてと、り文字を、れ文字に聽取りて解するとの兩途の間に置かれて、人々のおのが心のひきくゝに取捌かるゝなり。但し戯れて云はゞ、芭蕉かすりて行脚する秋など、いふ句にてもあらば、それは誰やらが倂にして、かすりはかすり

取りのかすりなるべけれど、此句は芭蕉の句にして、芭蕉が油にかすり取根性を發揮したりとも云ひ難く、又油皿の油を人さし指にて油壺へかすり入れて其指を鬚も無き頭へなすりつけたりとも想ひ難ければ、油をかすりてとする解のかたは不妙なり。油かすりてを、油皿に油の乏しくなりてと釋するは少しく無理に聞ゆれど、曉臺が言に、芭蕉の故郷の伊賀、並に伊勢あたりの言葉にて、漸く耗りて將に盡きんとするを、何々がかすりてと云ふよしなれば、かすは、かすり、かせる、乾涸の義として解く猿蓑逆志の説を可とすべし。乾ることをかすといふ語無しとすべからず。前句のかゝり、かすりてだに分明なれば、自然と會すべし。

新疊敷ならしたる月影に

野 水

新疊は青疊といへるとは異なり、表の新しきのみならで、中の床まで全く新しき也。敷ならずは敷均すなり、よく平らにしたるなり。一句新築既に成りて廣々と清らなるに、月影皎くさして、主人等は未だ移らざるさま見ゆ。雅客

と主人とこゝに在りと見、又は新世帯の若き夫婦など、在りと見るは、一句の仕立に目の届かぬといふものなり。新疊といひ、敷ならしたると云ひ、月影と云へる、そこに人氣少く、家具なども未だ取揃へられずして、老實なる男の遣はされて守り居たるさまのおのづから見えすや。月影にの、に文字の意ある使ひざまあることは前にも云へり。かゝる結構なる座敷のかゝる良き夜に、それを見ながら油かすりて宵寝するとなり。前句との附もおもしろく、此句の詮ずるところの新第良夜のおもむきも前句に到りて復還り來り反映して、薄ら寒きやうなる爽朗の感おのづと浮み、室の檜の匂ひ、庭の竹の聲も人に遠からぬやうなり。句の仕立を味は、ず、に文字を聽取らざれば、一句も拙く、前句にも附かぬやう覺ゆ。特にかゝる座敷にて油いぢりをしたりなどすると、解せる如き没分曉の老瞎漢には、芭蕉が此の第三を受取りたるを見て、見れども見えぬ萬重の雲霞隔たれるなるべし。

ならべて嬉し十のさかつき

去 來

前句に新宅のさまあり、と見ゆれば、此句には宴のさまを附けたり。新宅びらきの宴とするも、又は或祝宴の爲に新宅の建て設けられたるとするもよし。たゞの月祭とするは聊か相應はしからず。いづれにもせよ、然るべき祝儀の客まうけなりと見たりと解せるは宜し。ならべて嬉し十の盃は、配膳づらりと廣座敷にわたりて、各々に引盃あり、座上の長者のそのさまを見て満足に嬉しく思ふところなり。引盃とは大抵朱ぬりの頃合なる盃にて、賀宴婚禮の宴など、客多き時の、しかも少し式ばりたる折には、常に用ゐられしなり。前句と此句とを熟く味はへば、何事か芽出度事あり、たとへば一族の長の喜字米字の賀などありて、子孫叔姪賑々しく睦み集りたるさま見え、上席の老人、門葉の繁榮を目にして、望月のかくること無きといふほどにはあらずとも、嬉しく悦べる態なり。好奇の人の十種の盃をならべて獨り悦び娛むさまとしての解は前句と相映發せず。前句小さく清らなる座敷などならば、さる解もふさはしかるべし。

千代經べき物をさまざま／＼子日して

芭蕉

ものをと物をと紛れやすし。こゝは物をなり。辭のものにはあらず。辭のものをと取る時は反意になりて聞え難し。山家集下、千代經べき物をさながら集むとも君が齡を知らんものかは。祝の歌にして、さながらは、其儘、そつくり、悉皆と云はんが如し、千代經べき物を皆集むとも君が齡は猶それにも増して長く久しかるべしとの意なり。それを此處には俳諧にして、千代經べきめでたき物をさまざま／＼引きて取る子の日してとは作れり。子の日はねのびと讀むこと故實にして、根延びに通ずといひ、小松引くのみにはあらず、若菜、苜、芹、蕨、薺等を春の初の子の日に引くなり。前句は老人の賀とは定まらぬ祝宴なるを、こゝには七十七又は八十八の賀と取りて、子孫等の芽出度祝儀の物を様々上り、猶も千代八千代と祝ふさまを子の日にかけて云へるは、俳諧の自由の手利のわざなり。子の日は必ず小松を引くのみ公卿臭き遊と堅く取りては、此句の前句へのかゝりも一句の所詮も合點行かぬことゝなるなり。

但し芭蕉の句としては少し古風の味ありて、巧みに轉じたりとすべきのみなれど、前句甚だしき難句なり、此句を無きものとして、第五句を按じ見よ、芭蕉なればこそ如是聞苦しくもあらぬ句をもて新境を打開したりと悟るべきなり。舊註に文徳實錄天安元年の條を引きて、子日態といはれたる禁中正月曲宴の事を云へるは、張公の喫酒、李公の酔とぼけたる事也。

鶯の音にたびら雪ふる

凡兆

子日と誘はれて凡兆生命嬉しき春の野邊に出で、此句あり。たびら雪は和歌物語には聞えねど、俳諧には夙くより云へる語にて、春の雪なり。或はかたびら雪の略といふ。非ならん。帷子雪は帷子雪にて、これも俳諧に古き語なり。たびら雪はたびら雪に疑無けれど、たびら雪、だんびら雪ともいふ。所謂雪片大なること鶯の如しといふ誇張の詩句もこれに當るべき軽くして大なる雪なり。山家集上、子日しに霞たなびく野邊に出で、初鶯の聲をきく哉。鶯に霞ともあるべきながら春猶淺き子日なれば、たびら雪を降らせたるは凡

兆が俳諧ならむ。に文字と、たびら雪の語とのみの手柄なり。されど名高き西行の佳句、霞にむせぶ鶯の聲を翻案して、たびら雪に鶯の音は一座を驚かしたらむとをかし。西行の歌の本は、憂身にて聞くも惜きはとあり、これの前句はめでたく悦ばしき景色なり、これも亦更にをかし。

乗出して肱にあまる春の駒

去 來

春の駒といへる甚だ佳なり、たゞに季節を合すために春の字を置けりなどと思ひては此句の情を盡さず。かひなに餘るは、制馭しかぬる意なるが、言葉づかひおもしろし。乗出しては、人が馬を乗り出してなりや、馬が自ら進みて乗出してなりや。遠乗などするをも乗出してといふべく、又單に進みはやるをも乗出してと云ふべき習なれば、こゝの乗出しては二様に取らる。人が乗出してならば、乗出して後に肱に餘るなり、馬が乗出すならば、直に其のいきり逸るが爲に肱に餘るなり。詩としては前のより後の方緊切にして宜しかれど、馬の逸り出づるをば乗出してと云はんは少し穩妥ならず、又乗馬家の間

に然る言葉づかひの例も無きやうなれば、乗出しては人なりとすべく、作者も其意もて五文字を置けりと猜せらる。此の乗出しての五文字あるをもて、そこらあたりの凡馬にあらで、都よりせる馬、即ち毛づやも宜しく、鞍籠もきらびやかなる馬といふおもむきも見ゆれば、去來特に初五文字と次七字との間に少しの時間ある敘法を用ゐて、内々は其の微意の妙あるを誇れるかも知るべからず。前句への附は、こゝに此馬の金銜玉勒といふまでならずとも都人の乗馬なるかた、映り合ひ宜しきなり。さて駒は小馬子馬の義なれども、たゞ小馬子馬と解するは馬に乗らぬ人の解にて、馬に親しめる者の間に「こま」といふは牡馬のことなり。牡馬はもとより勇壯なるが、春の駒は陽氣に感じ青草を食ふが爲に、わけても勢あり、駒の朝いさみ、駒のみやひなどいふ諺も平時に於てさへある程なれば、春の駒は一トしほなり。すべて春の駒何々といふには此意を含みて逆へ解くべし。肱にあまるも、おのづからなる眞實相なり。これを一鞭加へて乗出しけるになど、曲齋の云へるは、句も聞知らず駒も見知らぬ愚言にして、肱にあまるところか、鞭うちても足らぬ老鶯のないらざまな

り。肱にあまるをば馬の狂奔俗に引驅けるといふを制しかぬるさまのみ思へるも拙し。引驅けるといふ場合の時は誰にても之を制することは叶はぬなり。肱に餘るはたゞ吾が思ふやうにならぬを優雅に且又馬上の姿情を具して云へるなり。此句を馬の狂奔し居るなど、見ては、前句には全く附かずなるなり、鶯の聲、たびら雪、さるもの、耳にも目にも入る隙などのあらばこそ、馬に引駆けられては天地も何も眞暗になるぞかし。引駆けられて猶鶯の聲の聞ゆるほどならば、穆王が越影超光源家の生暖摺墨にも、肱たゆかるべし、何ぞ名も無き春駒に、肱にあまるを歎せんや。

摩耶が高根に雲のかゝれる

野 水

前句も好し、此句も好し。摩耶山は登り十八町、二千餘尺もあるべければ、高根といふとも誣ひずといふべし。攝州武庫郡にあり。山上に切利天上寺ありて観音を安置す。十一面の古佛にして馬頭観音にはあらねど、摩耶に馬屋の響あるよりの事なりけむ、昔は二月初午の日、近國の人々飼馬の無難を祈る

とて馬を牽きて詣りしといふ。今は馬を牽きて詣るの事絶えたれども、尾桐明神といへる稀なる名の稻荷社ありて、初午詣は猶ほ行はる。新續古今集第二卷、源三位頼政、近江路や眞野の濱邊に駒とめて比良の高根の花を見るかな。まことに心よき歌にて、比良山を見るあたりにては、折々に人も云出づる一章なれば、それを踏へて、比良の高根に雲のかゝれるとしても悪しかるべくも無きところなるを、猶一段深く想ひめぐらして、俳諧の眼より摩耶山を見出したるは流石なり。摩耶山の馬にしをりあるは前に説けるが如し。特に前句、肱にあまる春の駒とありて、頼政が武將にして鞍上ゆたかに駒とめて比良の高根の花を仰ぎたるとは大に差あり。そこに春の駒の肱にあまる姿情を考へ、乃ち春の駒のみやひ、摩耶詣りの他の牝馬に慕ひ寄らんとするを、然る我儘はさせじと馬上の人の苦み制するところと見定め、摩耶が高根に雲のかゝれる、と其麓路の景色と做して、此一句をたゞ單に理屈の抜けたる寫實にしたる、野水も蕉門の古參、まことに侮り難く、子日よりの四句、針線の痕を滅盡して、衿も身ごろも袖袂も、各々善く附きたる、裁縫の妙を成し、布帛の美を露はせりとい